ＩＳ－疾風の生更ぎ－

しんかー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ－疾風の生更ぎ－

【Ｎコード】
Ｎ６６８３Ｑ

【作者名】
しんかー

【あらすじ】
レヴァン・デュノアと変態技術者たちがデュノア社を世界一にする小説。

ｓｅｃ．０１／生更ぎ（きさらぎ）（前書き）

やっぱり一人称転生ものが書きやすいので。

ｓｅｃ．０１／生更ぎ（きさらぎ）

「気が付いたかね？」

真っ白な空間。どこまでも広がった地平。いや、これは水平か？
お湯の温もりを感じるが、なぜか水面に座っていられる。
ふと声がしたような気がして後ろを振り向く。

「なぜに名のある河の主……」

そこには『千と千尋の神隠し』に登場した『名のある河の主』こと褐色の翁の面が浮遊していた。歯が数えるほどしか残っていないためどことなくグロテスクだが、それは同時に神秘的なものも内包していた。

「落ち着いているのう」

「俺は死んだ。過ぎたことをとやかく言う質じゃない」

そう、俺は死んだ。鉄砲水にやられて。今頃俺の肉体は泥に塗（まみ）れて醜態を晒していることだろう。
翁の面はカタカタと顎を動かしながら喋る。

「その件については済まなかった」

「何であんたが謝るんだ？」

「わしは神だ」

「そりゃあ八百万(やおよろず)的にはそうだろうさ。名のある河の主なんだし」
「そうではない。この姿はお主の心象を借りているに過ぎぬ」
何だよそれ、俺がいつそんな熱心なジブリファンになったよ。
俺は眉をひそめて尋ねる。
「俺はどうなる訳？」
「神の役割は定められた未来、運命を全うすることだ」
聞けよ。
「お主の死は運命に反する。神の行いからあぶれてしまった魂だ。故にお主の魂を別な世界へと、輪廻から解離させて更生させる」
よく分からないが、要は異世界転生か。どうやら俺は生き返れるらしい。
だがちょっと待て。俺が転生することは転生先の世界の運命をねじ曲げることにはならないのか？
「転生ではなく更生だ。心配することはない、お主の世界における創作物の世界なのだからのう」
「おいっ、それはマジか！？」
「マジだ」
マジらしい。

そうかそうか、俺はついに手に入れたのか！　人型メカのパイロットへの切符を！

「ついては、何か要望はあるかね？　ある程度は配慮しよう」

「よしっ、だったら人型ロボットのある世界にしてくれ！　スパロボは駄目だぞ、ある程度硬派なやつだ！」

「いいだろう。次に、これは個人的な礼としてなのだが……」

まだ何かあるようだ。常日頃夢見ていたことが現実になると知って、今の俺は有頂天だ。何でも来い。

「一つほしいものをやろう。形なきものだ」

「形なきもの？」

つまり転生……じゃなくて更生チートか？　どこに行くか分からない以上、知識は意味を成さないだろう。世界によって物理法則は異なるはずだ。ならば形なきものとは『力』を意味する。

いいだろう。ロボットものでもっとも威力を発揮する能力、そんなものは決まっている。あらゆる武器、兵器を使いこなす力。

「決まったか？」

「ああ……」

その力の名は――

「ガンダールヴだ」

.

ｓｅｃ．０２／我らが多脚ちゃん

おぎゃーおぎゃー。オーギル。
私は今、生まれた！

「どうされました、レヴァン様？」

「何でもない、少し昔を思い出していただけさ」

「五歳児がですか」

「黙っていろ、セバスチャン」

更生してから五年がたった。当初はハイテンションに任せてブイブイいわせるつもりだったが、いきなり出鼻を挫かれる事態となったのだ。
ロボットなど見る影もない。
見当たらないのだ。ネットで調べれば少しくらい見つかりそうなものだが、すべてはずれ。俺のいた世界よりも科学は進歩しているようだが、それだけ。一時は絶望したものだ。

「それでも『ないなら作れ』と頑張っている訳だが……」

「誰と話しているのですか？」

黙れ執事。
俺の名はレヴァン・デュノア。フランスの大企業デュノア・カンパニー社長、ライアン・デュノアの息子。いわゆる御曹司というやつだ。

レヴァンテインみたいで厨二かと思ったら、本当にレヴァンテインらしい。綴りはＬｅｖａｎｔ、『日の出ずる方』という意味だとか。

容姿はお袋からもらった赤髪に、親父からもらった緑眼。何を間違ったのか、髪はワインレッドではなくモンザレッド。一言で言うなら鮮烈、またはペンキの赤。もうね、スパロボを覚悟している訳だ。こんな頭してロボットものなんてスパロボくらいしか思い付かないし。

今は来るべき日のため勉強中。何せまだ肝心の『ロボット』は開発されていないのだ。俺がロボットを開発して、世界に俺の納得するフラッグシップを立ててしまえば、一八メートルとかふざけた大きさのものは作られないだろうから。

俺は一応デュノア社の未来を背負って立つ跡取りなので、親父は英才教育を施してくれる。大企業の跡取り息子で天才的科学者で天才パイロットとくれば……最強だな。おまけに親父の遺伝子を受け継いでイケメンときている。正直、負ける気がしない。フヒヒ。

◇◇◇

私はデュノア家に仕える執事にして、レヴァン様の教育係を務めさせていただいている身にある。セバスチャンと呼ばれてはいるものの、本名ではない。

それはともかく、レヴァン様はいわゆる天才だった。三歳で小学生の履修範囲を修め、五歳にして大学の範囲に手を出しておられる。言語はフランス語だけでなく、英語、果ては日本語までも使いこなす。

私はときどき彼の才能が怖くなる。このまま彼が成長していけば、一体どうなるのだろうか、と。

◇◇◇

さて、早くもレヴァン・デュノアは一〇歳。光陰矢のごとし、だ。最近忙しいのか、親父の帰りが遅い。ついでに言うと、朝帰りが多い気がする。まあいい、俺には関係のないことだ。

「不整地走破性と射撃安定を兼ね備えるなら、多脚構造は必須だと考えますが」

「しかし整備性を考えると、複雑な関節構造は――」

デュノア社では、現在新型戦車草案がまとめられている。まったく新しい設計思想を持つ戦車を開発するための第一段階だ。ちなみに俺の案。

俺は大学を飛び級で卒業して、デュノア社に入社。社長の息子というコネを使って特別なポストを与えられている。だから多少無茶を通して会議を開くことも可能だ。奴らにとっても次期社長候補の俺の心証をよくしておきたいだろうしな。

そこでここがどんな世界か分からない以上、安全策はとっておかなければならないから、ミリメカお馴染みの多脚戦車を作っておこうという訳だ。

人型ロボットを作れるくらいの技術が俺の生きている内に開発されることは分かっているので、その前進となるであろう多脚戦車は必須。ならばデュノアが世界に先駆けて作ってしまえば、人型ロボット技術開発への大きなアドバンテージとなる。ただでさえ内は技術力が不足気味でライセンス生産品が多いんだ。これくらいやらないとこの先生き残れないだろう。ビーム兵器を本気で作ろうとして

いる国もあることだしな。

◇◇◇

「さてジャン、必死の説得と根回しのおかげで何とか予算が降りた訳だが」

「我らの悲願に一歩前進ですな」

話し相手はロマンを求める科学者ことジャン・クリムト。俺の数少ない同志の一人だ。ロボット工学に明るく、量子物理学にも通じている。年齢的に労働者として扱えない俺だが、ジャンを代理人に立てることで自分のチームを組織することを許されているため、彼は俺にとってなくてはならない人材だ。

「目下の問題は、制御ＡＩと動力だな」

「量子コンピュータに燃料電池ですか……」

「後者については別の部署に依頼するしかあるまい。デュノアは燃料電池には世界でも有数の技術を持つが、それでもまだ足りないし、内の規模じゃ手が出せないからな」

ひとまずのところは必要な技術の確認のため、設計草案からだな。何がどれくらい必要なのか分からなければ、何を優先すべきか決まらないしな。

◇◇◇

俺たち『多脚チーム』は動きだした。蜘蛛に代表される節足動物の関節の動きや重心バランスの取り方を理解するために『運動分析班』を、多脚による射撃反動の能動的吸収を研究するために『構造班』を、そして複雑な制御システムを構築する『システム班』を作った。

初めての試みだったから何かと面倒も多かったが、俺たちは決して立ち止まることなく、まだ見ぬ多脚ちゃんのために心血を注いだ。

体外的には『フランスの技術力を見せ付けるためのロボット作り』として兵器開発を隠匿した。

外部技術者も多く招き、開発に尽力した。

「最近、面白いものを作っているらしいな、レヴァン」

計画がスタートしてから二年たったある日、俺は親父に呼ばれた。ずっと研究室に籠もりっきりだったし報告は全部構造班のジャンに任せてたから、親父と会うのは久しぶりだ。

「多脚ちゃん……多脚戦車のことでしょうか」

「正直最初は子どもの戯れ言かと思っていたが、なかなかどうして形になってきている」

大人の渋い魅力溢れる様に、社長の威厳を垣間見る。細められた目はご機嫌なように見えた。

研究に費やした予算はかなりのものだが、副次的に生まれた技術は多く産業用ロボットでもシェアを獲得しているのだ。それから航空機、取り分けヘリコプター用のガンカメラだとか、介護ロボット

なども伸びているらしい。

「同志たちの技術屋魂が成せる業（わざ）です」

「そうだな。お前のところだけ他とは雰囲気が違う。私があまり寄らなかったのもそこのところが関係しているのだが……」

そう、『多脚チーム』は他とは違う。あれは『開発チーム』などではなく、より言及すれば『多脚ちゃん愛好会』だ。そうしたのは俺だがな。

毎日三回、朝出社してからと午後の部が始まってから、そして解散時に皆で多脚ちゃんに愛の言葉を捧げる。始めは俺の子どもな外見から遊びで付き合ってくれたが、今では皆本気だ。多脚ちゃんを愛する自分に皆誇りを持っており、仕事だからではなく自分の信仰のために働いている。ある種のカルト的団結だが、仕事感覚で妙にぎすぎすするよりずっといい。人間、信仰心から十字軍だってなし得たのだから。

「まあいい、予算を上げてやる。必ず完成させろ」

「了解です」

ニヤリと俺は笑った。

ｓｅｃ．０３／多脚の丘に変態共は集う

俺は社長を後にした。フォーマルな雰囲気の本社を出て、手配した専用車に乗り込む。ちなみにイタ車だ。達筆な漢字で『多脚愛』と大きくデカールが貼られている。

広々とした社内で、俺のケータイが電波ソング『多脚ちゃんのテーマ』を流して着信を知らせた。

「どうした……何っ！？　そうか、すぐ行く。――ん？　分かった。ならばこのままオフィスに向かうとしよう。彼の意思を継がねばな」

俺は運転手に言って、車の速度を速めた。

◇◇◇

「同志諸君！」

『多脚チーム』のとある研究室にスタッフ、もとい同志を集めて、俺は変声期を迎えた声で高々に言い放った。

「いいニュースと悪いニュースがある！」

神妙な面持ちで皆の注目を集める俺に、生物学者で『運動分析班』チーフのアリ・カバニスが言う。その目はただの子どもを見る目ではなく、目的を同じくした仲間に向ける目だ。

「よきニュースからお話し願いたい」

「分かった」

俺は心の中で報告事項を反芻し、椅子の上で全員の顔を見渡す。

「『多脚チーム』の予算の上方修整が決定した！」

「おお！」

「本当か！」

「愛の力だ！」

とたんに沸き立つ研究室内。皆一様にガッツポーズやらジャンプやらで喜びを表現している。興奮した様子のアリが尋ねてくる。

「そ、それで、値の方は！？」

「聞いて驚けっ、一五パーセントだ！」

「キターーー！」

「これで勝つる！」

「多脚に黄金の時代を！」

「すぐさま半年後のトライアル用プロトタイプを製作せねば！」

凄まじい数字に半狂乱である。それもそうだ。俺たちはこの二年、

血反吐を吐きながらロマンを追い求めて来たのだ。予算アップは自らの信仰心を認められたことを意味する。これを機に、さらに予算が拡大されるかもしれない。
小さな椅子の上から眺める景色は荘厳だった。多脚ちゃんという目標の下、俺に付いてきてくれる人たちがいる。それぞれが胸に熱い想いを抱き、同志と呼べる仲間とともに汗を流す。そこには前世では得られなかった究極の一体感があった。
しかし、だからこそ悪いニュースを伝えるのが苦々しかった。

「喜んでいるところ済まない。悪いニュースもあるんだ」

再び静まる室内。切り替えが早いのは高学歴者の性(さが)か。ああ、知らせるのがはばかられる、水をさすような知らせだ。

「ジャン・クリムト博士が倒れた。過労によるものらしい」

ジャンは『多脚チーム』のメンバーでは最年長の五三歳だが、寝食を惜しんで研究開発に打ち込んだ結果、ガタが来たらしかった。

「幸い命に別状はないが、チームとしてはこれ以上彼を酷使する訳にもいかない」

チーム最年少の俺の言葉に皆暗い表情を浮かべる。
ジャンのチームへの貢献度は誰にも増して高い。幅広い知識と確かな実力を持つ、デュノア全体で見ても有能な科学者だ。そして俺を含めチームの誰よりも多脚ロボットにロマンを抱いていた。壮年を過ぎても少年らしい心を忘れない、チームの中でも父や兄のような人だったのだ。
その彼の突然の脱落。悔しげに歯を食い縛る者、額に手を当てて悲しむ者、顔をしかめて微動だにしない者。各々のリアクションは

様々だが、皆の憤りに違いはない。
ふと、若手の科学者の一人が叫んだ。皆の視線が集まる。
「何やってんですか！　ジャンさんは自分の信念を貫いて倒れたんだ。本望じゃないっすか！　それに対して悲しむのはジャンさんに失礼だ！　それに、あの人がそう簡単にくたばる訳がない。誰よりもタフだし、何よりマッドだ。脳汁垂れ流してでも復活するに決まってる！」
若い彼の訴えで、皆に精気が戻ってくる。いや、それ以上に奮起していた。皆の心の支えであったジャンがいなくなって、逆に自分の足で立てるようになったのかもしれない。皆を奮い立たせてくれた彼に続けと、俺も声を張り上げる。
「彼の言う通りだ！　俺たちは、何があっても立ち止まらない！　どんな地形も走破する多脚のように、ジャンのためにも立ち止まる訳にはいかない！」
「そうです！　彼の意思を継ぎ、必ずや成し遂げねばなりません！」
アリも触発されたのか大振りなジェスチャーで煽（あお）る。
「我ら多脚の徒なり！」
「多脚を愛し、多脚に生き、多脚を創る者なり！」
誰からともなく『多脚愛の祝詞（のりと）』が捧げられる。
「すべての血と、すべての汗は、ただ多脚のために！」

全員で唱え終わると、皆一斉に散開して持ち場に戻る。その間に言葉は不要だ。これから何をすべきかは皆分かっている。

◇◇◇

怒濤の半年だった。ジャンが倒れたことは皆の心境に大きな影響を与えた。まず、覚悟が変わった。誰一人として弱音は吐かず、過労で一人、また一人と倒れていく同志たちの骸(むくろ)を越え、俺たちはこの日を迎えた。

「レヴァン、頼みましたよ」

「ああ、俺に任せときな」

国際科学博覧会。その会場に、俺はいた。

各国が自国の科学技術をアピールする場であると同時、企業の宣伝の場でもあるこのイベントは毎年開催されるのだが、人が実際に乗る多脚メカを出展するのは今回が初めてだ。今もトレーラーの中で『多脚チーム』の試作した多脚ちゃんが調整を受けている。

この半年で開発は急転直下で進展し、実用化の兆(きざ)しが見えてきた。神から貰ったガンダールヴのルーンが役立ったのは言うまでもない。

ガンダールヴはあらゆる武器を達人並に使いこなす力だが、同時に触れた武器の情報を引き出すことができる。より理解しているものについてはさらにその情報は深化する。多脚ちゃんは試作機においてもその本質は兵器――武器であるから、触れただけで問題点や欠陥はだいたい分かるのだ。少し動かしてみれば改善点は見えてくるのだから、試行錯誤のスピードは凄まじい。ちなみに左手に刻まれたルーン文字は俺にしか見えないらしい。

俺がここにいるのも、ガンダールヴが供給するテストパイロットとして申し分ない操作技術と、一二歳の軽い体重が主な理由だ。子どもを乗せることで操作が簡単だと印象付けるという理由もある。

さて、そろそろ俺たち『多脚チーム』の出番だ。障害物を置いたルートを作成している。

『次はフランス、デュノア社の出展です』

さあ来た。ジャンたちも生放送で見てるんだ。上手くやるぞ、『Ｘ－アレニエ』。

◇◇◇

六本の脚が高速で入れ代わり、機体を前に押しやる。黄色に塗装されたフレームが颯爽と駆ける。障害物をときに避け、ときに踏み越え、ときに跳び越えるさまは、さながらハエトリグモのようだ。

試作型多脚ちゃん『Ｘ－アレニエ』の機体下部には六本の脚の基部があり、その上にラジエーターと操縦席がある。操縦席には二つの操縦桿とペダルがあり、それぞれを組み合わせることで補助ＡＩが特定の動作を状況に応じてカスタマイズして機体を動かす『ブロック・アクション方式』を採用している。ガンダールヴで欠陥を調べてプログラムを組んだから、その完成度は高い。昆虫でいう腹の部分には燃料電池とＡＩコンピューターが搭載されている。可動式なので空中でバランスをとるスタビライザーの役割も担う。

「そろそろ直角ターンか」

重量二五〇キログラムの蜘蛛が時速三〇キロメートルで進むさま

はなかなか迫力がある。俺は標高二メートルの視界から正面の壁目がけて突進した。

ガガガガガガガッ！

壁が脚に叩かれるマシンガンのような音が響き、俺は速度を殺さずターンした。片列の脚三本で壁を蹴って強引に移動ベクトルを反らしたのだ。『Ｘ－アレニエ』はその次のモトクロスで使うような波状地形を難なくクリアし、最後に三メートルほどの段差を跳び下りて見事着地した。

◇◇◇

私はジャン・クリムト。デュノア社、いや、『多脚チーム』所属の科学者だ。半年前に過労で心不全を起こし倒れた。今は大事をとって入院している。

テレビで国際科学博覧会の様子を見て、私は胸が張り裂けそうな思いになった。いや実際に心臓が張り裂けそうになったから入院しているのだが。

子どものころ見た『ロボット』が、そこにいた。それを自在に操るレヴァンの姿に終始涙を流していた。

「これだ、これこそ私が夢見ていたものだ……ああ、神よ。彼がいなければきっと生きている内に見ることは叶わなかったろう……感謝します」

嬉しいと思う反面、なぜそこに居合わせられなかったのかと悔しくも思った。私の多脚愛は誰にも負けないと自負しているし、事実

そうあるように振る舞ってきたつもりだ。それなのになぜと、そう思わずにはいられない。この半年、私とて何もしなかった訳ではない。

「退院した暁には、私の半年の成果を見せてやるぞ、同志たちよ。フフハハ……」

◇◇◇

「同志たちよ、ジャン・クリムトが帰って来たぞ！」

とたんに巻き起こる歓声。博覧会で功を修めた俺たち『多脚チーム』は、父なるジャン・クリムトの突然の出社に驚きを隠せなかった。彼はメンバーが見舞いに来るのを『見舞いに来る暇があったら研究しろ』と言って拒絶していたし、こちらの情報は逐一入れていたようだが通話などもタブーとしていたから声を聞くのは本当に久しぶりだ。ジャンが入院してから代表代理を務めていたアリ・カバニスがニヤニヤしているので、彼はジャンの復帰を知っていたのだろう。

「諸君に見せたいものがある。我らが多脚戦車を新たな次元に押し上げる構想だ！」

彼は声高々にディスクをデスクトップに挿入した。

備え付けの巨大なディスプレイ（デュノア製）が映像を映し出し、プレゼンテーションが始まった。

◇◇◇

ジャンが持ってきた構想はアクチュエーターに関するものだった。主関節に加え補助を設けることで衝撃吸収力を高める、いわゆる『アクチュエーター複雑系』だ。

これにより今までよりも少ない関節で柔軟かつ強靭な脚部をデザインできるようになった。構造は複雑になったものの、電力の分散を防ぎ結果的にパワーや構造的耐久力は上昇。よりその戦闘適性を高めたのだ。

博覧会の成功からデュノア社にはフランス政府その他のスポンサーが付き、研究資金だけでなく優秀な技術者の斡旋なども積極的に行われた。ときたま厄介払いで送られたのであろう変態が混じっていたりもするが、それはむしろ歓迎すべきなので『多脚チーム』は急速に拡大していった。新しく入ってきた者はまず電波ソング『多脚ちゃんのテーマ』や『多脚愛の祝詞』他、あらゆる手を尽くして洗脳される。それは実機操縦やら一級の設備やらも含み、同志として必要な『大切な何か』を植え付けていくのだ。

「もはやチームなど、生易しいものではない。これはグループだ。――現刻をもって、技術屋集団『キサラギ』を発足する！」

デュノア社は変態共の力を借りて加速度的に成長していった。

レヴァン・デュノアが生まれてから、一四年の歳月が流れていた。

ｓｅｃ．０３／多脚の丘に変態共は集う（後書き）

次回はついに変態共の悲願達成。そしてヒロインが動きだす。

ｓｅｃ．０４／多脚ちゃんとＩＳちゃん

『多脚こそ最強！　多脚こそ至上！　地上に敵はなし！』

試験場に響いたスピーカーからの声。各国の軍事関係者やマスコミは唖然としていた。

俺たちキサラギの、血と汗と涙と時間と、そして『大切な何か』の結晶にして俺の操縦する多脚ちゃんは、瞬く間に五機の主力戦車を見つけて屠（ほふ）り、戦闘ヘリに一二〇ミリ弾をぶち込んだ。すべて模擬弾だったが。

その圧倒的かつ一方的な制圧に、会場は静まり返っていた。この日ばかりはメンバー総出で来ていたキサラギの同志たちは、皆多脚ちゃんの大戦果に静かに涙を流していた。

『ＭＬＴ１０１』、またの名を『タランテラ』が装輪多脚戦車時代の礎を築いた瞬間だった。

◇◇◇

『ＭＬＴ１０１　タランテラ』は世界で最初の多脚戦車にして、地上最強の兵器である。

新世代複合装甲で覆われた機体はまるで甲殻類のように強靭かつしなやかだ。

キサラギのメンバーが心血を注いで造り上げた情熱の顕現。俺たちの夢と希望を載せて、我らが仇敵を葬る。

アクチュエーター複雑系の完成で重装甲化が可能となり、当初行われていた四脚派と六脚派の派閥争いも、ペイロードと出力問題に

より四脚派の勝利に終わった。六脚の利点は二本までなら脚の破損にも耐えられることだが、機動力とパワー、防御力に優れる四脚が採用されたのだ。うなだれる六脚派の連中の顔が記憶に新しい。

脚の先端にはタイヤが備えられ、高速移動を実現している。舗装された道路なら最大時速は時速八〇キロメートルに達する。重量のあるディーゼルエンジンを搭載していないからこその数字だ。

武装は一二〇ミリ滑腔砲一門、二〇ミリ機関砲二門、可動式ミサイル発射機二機。四脚の基部の上に砲塔とランチャーがあり、機関砲は基部から生える二本の『腕』に内蔵されている。一二・七ミリ機関銃を機体下部に取り付けることもできる。まさにハリネズミのような武装の数々である。

機体重量は四五トンで、近頃の戦車と比べて非常に軽い。それもそのはず、動力は燃料電池だし燃料は軽量な液体水素だ。キャタピラもない。こんな重量で一二〇ミリ砲の反動を押さえられるのかと不安になるかもしれないが、生憎タランテラはただの戦車じゃない。多脚戦車だ。反動なんぞ脚で吸収できる。おまけに足首に回転軸があるから、スーパーのカートのように正面を向いたまま三六〇度すべての方向に移動できる。

この多脚戦車の最大の特徴は外見ではなく、その操縦システムにある。キサラギの変態技術者たちが総力を挙げて開発した、『多脚ちゃんと合体したい』をコンセプトに持つ新式装備、『ＮＥＸＵＳ（ネクサス）』である。ネクサスとは『Ｎｅｕｒｏ　Ｅｘａｃｔｌｙ　Ｕｎｉｔｅ　Ｓｙｓｔｅｍ（神経精密同調システム）』を意味する。

このシステムにより操縦者の脳と制御ＡＩをリンクさせ、多脚戦車を自らの肉体として制御することができる。人間の脳と『多脚戦車』という肉体では規格が合わないため、思考力を人間の脳に任せ、運動制御をＡＩに任せるのだ。ＡＩと言ってもあくまで人間の脳の拡張ユニットであるため自律能力はなく、人が乗らなければ起動しないというのがミソだ。完成したときは感動よりも、むしろ呆れてしまった。

さて、多脚ちゃんと合体できるこのネクサスだが、効果はそれだけではない。出力だけでなく入力も可能なのだ。全周囲複合センサーの情報を並列処理し、尋常でない速度で敵を発見、攻撃を回避、反射的に撃滅する。人間の脳でコンピューターで代用可能な機能のほとんどがＡＩ側で処理できるため、誰が乗っても一定の戦闘力を発揮できるのだ。一四歳の子どもでもな。

型式番号の『ＭＬＴ１０１』は主力有脚戦車第一世代〇一型という意味だ。愛称の『タランテラ』はタランチュラの由来となったイタリア南部タラント地方で起こった急速舞踏曲、タランテラにちなんでいる。二人一組になって踊ることから、ネクサスが実現する『人機一体』を象徴している。命名者はジャンだ。相変わらず無駄に知識豊富だった。

以上の通り多脚ちゃんは非常に有用かつ強力な兵器として世に出た。戦場の常識を一変させ、超ベストセラーを実現するはずだった。

――そう、『だった』のだ……。

◇◇◇

「日本を射程に修めているミサイルが全弾発射！？　そんな馬鹿なことがあるか！？」

「あり得ない……たった一機で二〇〇〇発すべてを迎撃するなどと……」

「クソッ、あのインフィニットなんとかのせいでタランテラの発注

が全然こないっ！」

最悪だ……。俺たちキサラギの技術の結晶が、一機いれば主力戦車一〇機と渡り合えると言われた多脚ちゃんが、あんな小娘一人の手で創られたコスプレまがいのパワードスーツ風情に世界から駆逐されるだなんて……。

キサラギの施設内は荒れ放題だった。酒を食らい壁に頭をぶつける研究員たちで満たされていた。連日ニュースでその華々しい技術革新を報道していたフランスのマスコミですら、このＩＳなる戦えるコスプレグッズに目移りしている。

各国首脳は多脚戦車のことなんてさっぱり忘れて、ＩＳとその開発者がいる日本への対応を話し合っている。ＩＳの開発者である篠ノ乃束とかいうアマは勝手に世界にＩＳのコアとやらをばらまくし、それがさらにマスコミを騒がせるしで世界情勢はカオスの様相を呈していた。アラスカ条約？　何それおいしいの？

内にも二つほど送られてきたＩＳコアだが、正直勘弁してほしい。変態共の目が怖い、むしろイッている。

「復讐しろ復讐しろ復讐しろ復讐しろ復讐しろ……」

「許すまじ篠ノ乃束……」

何か過労で半死して悪霊化してる奴がいるんですけど……プロのエクソシストでもこれは呪い殺されるな――と思ったらジャン、お前だったのか。

かく言う俺も相当キテいる。

ああ、キサラギはこんなもんじゃあない。やられたまま終わる腰抜けではない。俺たちは自他共に認める天才だ。そして何より『変態』だ。

変態は止まらない。ジャンが倒れた日も、俺たちは止まらなかっ

た。例えどんな障害が待ち受けていようとも、俺たちは多脚戦車のごとく突破してきた。
ＩＳが何だ、篠ノ乃束が何だ！　俺たちは『キサラギ』だ！　世界最強の技術者集団だ！　この『黄条旗』の下に集まった同志だ！

「――そうだろみんな！」

変態技術者集団キサラギの『本気』が始まった。

ｓｅｃ．０４／多脚ちゃんとＩＳちゃん（後書き）

逆境は常に彼らを待ち構えている。頑張れ技術のキサラギ！

ｓｅｃ．０５／漢（おとこ）のとっつき（前書き）

白騎士事件より二年足らず、ＩＳ学園開校。そして――

ｓｅｃ．０５／漢（おとこ）のとっつき

「ちーちゃんももう高校生なんだねぇ」

「お前もだろうが……まったく、どう収拾を付ける気だ？」

「収拾って言ってもねぇ、これが一番いい形だったんじゃないかなぁ」

私の隣でニコニコしながらＰＤＡをいじっているのは、織斑千冬の親友にして世界のカオスの中心に位置する少女、篠ノ乃束だ。

ＩＳが世界に名を轟かせ、各国は驚くべき速さで対応を決めていった。軍施設が軒並みハッキングされ、スパイ容疑でこの親友は世界中の国から身柄引き渡し要求がきていたわけだが、彼女を守るために日本政府は苦肉の策で事実上の治外法権区域であるＩＳ学園の設立を容認したのだ。

そのときの外交官たちの気苦労は計り知れないが、当の本人はどこ吹く風である。

「『白騎士』はバラしちゃったけど、ちーちゃん専用に新しく『暮桜』を作ってみました！　武器は刀一振りだけだけど、ちーちゃんなら問題ないよね！」

「お前という奴は、自重を知らんのか……」

◇◇◇

アラスカ条約が締結されてから、俺たちキサラギは技術者を多脚班とＩＳ班に分けて研究開発を行ってきた。
多脚班のチーフは当然ジャン、ＩＳ班のチーフにはエラ・ルジャンドルという女性研究員が抜擢された。
タランテラが不発に終わりキサラギのメンバーは皆燃え尽きていたものの、ようやく頭の冷めてきたお偉いさんたちが目を向けてくれたおかげで、少しずつだが売り上げが伸びてきている。そのときの広報部のテンションはヤバかった。タランテラを褒めちぎり――その称賛に見合う性能を発揮できる辺りさすがキサラギ製だ――自分で言った賛辞にさらにテンションを上げるインフレ状態だったからな。あれは完全にトリップしていた。アドレナリンは致死量に達していたはずだ。事実一人倒れたし。
しかしこのまま我らが多脚ちゃんを軍事の範疇で持て余している訳にもいかなかったから――主に経済的な理由で――俺たちは計画を速めることにしたのだ。

「このままでは多脚ちゃんの素晴らしさが世界に伝わらない！　計画を速め、民間市場に乗り出すんだ！」

その案は二秒で可決された。『多脚チーム』の本来の目的は『多脚ちゃんのロマンを世界に提供する』ことだったから、それも当然と言える。多脚戦車の操縦システムである『ネクサス』はタランテラについても完全なブラックボックスだ、問題はないだろう。おまけに、暗号はランダムにパターンを随時変更しているし、不正に侵入しようものなら攻性防壁が作動してハッカーのコンピューターのＣＰＵを焼き切る。それを突破されても自壊プログラムが作動するのだ。情報漏洩はあり得ない。破れるとしたら篠ノ乃束くらいのものだろう。
多脚班では民間向けの次世代レースマシンとして開発している。ＩＳに多くの技術者を割いているため、もう少し時間がかかりそう

だ。タランテラ以上の素晴らしい運動性能を想定しているから武装した多脚ちゃんを用いた犯罪も当然起こるだろうが、そのときは警察や軍絡みの注文が来るだけなのでキサラギとしてはバッチコイだ。所詮力は力でしかない。作った後のことなんて使う奴次第なのだから。その点篠ノ乃束はいい判断を下したのかも知れない。核開発を抑制し、ＩＳも四六七機以上に増えることはない。まあ、本人は自分の力を顕示したかっただけなのかもしれないが。

さて、ＩＳの第一世代が各国で早急に開発されているが、そのほとんどは『白騎士』の劣化コピー版でしかない。まだ誰もＩＳについては手探りの状態なのだから仕方がないが、キサラギがそれで満足するはずがない。

キサラギのメンバーの多くは篠ノ乃束に強い敵愾心を抱いている。その彼女が作った『白騎士』をただ真似ただけの機体にどうして満足できようか。キサラギは変態共の集まりだ、俺たちには俺たちのやり方がある。

そんなとき、俺が試作機を起動してしまった、しかもとんでもなく上手く操縦する。あらゆる武器を使いこなすガンダールヴの力だ。

「キサラギ（俺たち）の意地を見せてやるぜ！」

ＩＳにはある大きな欠陥があった。起動できるのが女性だけだということだ。それが篠ノ乃束の故意によるものなのかどうなのかは不明だが、俺は一片に最強の男となった。

しかし、その事実は秘匿された。知られればキサラギどころかフランスにすらいられなくなるかもしれないからだ。社長の息子でキサラギでも指折りの科学者だった俺は、鮮烈な赤髪が映えるデュノア社のマスコットキャラとしても定評があった。フランス政府も俺の存在を重く見たのだろう。何せ弱冠一〇歳で自分の開発チームを指揮し、たった四年で結果を出した天才だ。日本政府にとっての篠ノ乃束くらいには価値ある人材のはずだ。

タランテラの売り上げは芳しくなかったものの、これから長期的には凄まじい売れ行きが期待されているから問題はない。フランス政府は俺の存在をもってＩＳ開発に全力を注いだ。キサラギにこれでもかと投資し、一刻も早い完成を望んだ。

こういうものは第一世代の段階で金を惜しんではいけない。例え赤字になってでも第一世代の完成度を高め、第二、第三で利益を回収できればそれでいいのだ。少なくとも金を惜しんで儲けがでることは決してないのだから。

◇◇◇

「完成だ……これで篠ノ乃束を見返してやる！」

デュノア製第一世代ＩＳ改修機『ラファール・カスタム』が完成した。

『白騎士』の劣化コピーの域を出ない『ラファール』を、俺の専用機として全体的にチューンナップした機体だ。『ラファール』の黄色を基調としたカラーリングとは打って変わって、俺の赤髪に合わせた鮮烈なモンザレッドの機体色。白の幾何学迷彩が新しさを際立たせる。

『ラファール』は加速性能と機体レスポンスのよさが特徴の、デュノア最初のＩＳだ。初めてでろくなものが作れるはずがないのは経験則から分かっていたから、徹底的に訓練機としての必要な性能を求めた結果だ。

これといった性能の角はないが、各種火器の取り回しのよさと動かしやすさを追求している。防御能力はあまり高くないのが欠点といえば欠点か。

俺専用機の『ラファール・カスタム』はその経験を生かして開発

された、第二世代への階段に当たる機体だ。現状可能な限りの機動力を持たせ、防御は両肩に接続されたシールドにそのほとんどを頼っている。技量次第で格上とやり合えるように調整されているのだ。

武装については――

「同志諸君。今世界は、ＩＳによって女尊男卑化の一途を辿っている！　俺は男女の間に貴賤（きせん）などないものと信じている！　ならば、今一度男の誇りというものを見せ付けようではないか！」

「何をするつもりなの？」

エラが『また始まった』とでも言いたげな顔で尋ねてくる。俺は声を張って答えた。

「見るがいい！　これぞ男の誇り、覚悟、意地！　その姿を現せっ、パァイルバンカーァァァァァ！」

モニターに映し出された設計図に研究所内の男の目は釘付けになった。ついでに己がイチモツに手を当てて涙を流した。

そこに映されていたのは、太く強靭な一本の杭打ち器。男の象徴を彷彿とさせるその雄々しく猛々しい外観は、女に虐げられてきた男たちの目に烈火を宿すには十分すぎるほどだった。

レヴァン・デュノア誕生より一七年、男たちの反撃が始まった。

ｓｅｃ．０５／漢（おとこ）のとっつき（後書き）

今、男の魂が雄々しき叫びを上げる……。

次回はレヴァンが代表候補生となってＩＳ学園に編入。

ｓｅｃ．０６／雌雄（前書き）

世界で唯一のＩＳを使える男が、ＩＳ学園に来襲する。

ｓｅｃ．０６／雌雄

線路の上を俺を乗せた一匹の多脚ちゃんが進む。
『スタリオン・コンセプト』、キサラギが開発した次世代有脚型レーシングマシンである。二対の脚であらゆる地形を走破し、その先端のリニアホイールで高速移動を行う、多脚戦車を公道用に再設計したモデル、その試作機だ。試作と言っても、近い内に全世界で同時リリースされる訳だが。

「しっあわっせは～、あーるいってこーない、だーかーらあっるいってゆっくんーだね～♪」

ＩＳ学園に向かうモノレールの線路上に俺の歌声が響く。走りは快調、今はモノレールも来ない。本当なら朝一で行かなければならないのだが、それだと多脚ちゃんを連れていけないからな、遅刻することにした次第だ。

「いっちにーちいっぽ、みーっかーでさーんぽ、さーんっぽすっすんーでにっほさーがる～♪」

この『スタリオン・コンセプト』は『ＭＬＴ１０１　タランテラ』の武装をオミットして、乗用車サイズまで小型化、腕を取り外して完全にレース仕様にしてある。相変わらず装甲はあるが、軽量なジュラルミン系や炭素繊維などを使用している。全部炭素繊維で作ればもっと軽くなったんだろうが、それだと摩擦力が足りず路面接地力が低下するので、ジュラルミン系軽合金も併用しているのだ。
以上の説明でも分かる通り、兵器ではないので俺のガンダールヴは発動しない。まあモトクロスの延長みたいなものだからいいのだ

が。
その性質上バイクに近しいものがある。重量はだいたい三〇〇キログラムほどで最高時速はおよそ時速二〇〇キロメートル。バイクには見劣りするが、オフロードなら相当なんじゃなかろうか。
コクピットは車体後部に接続されたポッドがそれだ。他の部分より頑丈にできている。

「じーんせいーは、ワン、ツー、ワン♪……お、来た！」

ＩＳ学園の駅へと到達。ジャンプして線路を抜け、正門を目指す。リニアホイールが小気味いい音をたてて機体を加速させる。タランテラを遥かに凌ぐ運動性能でカーブを曲がり、見事正門を突破した。
世界で唯一の男のＩＳ操者の登場に世界が沸き立つ中、このスタリオンを出せばタランテラの二の舞で注目がそれることは必至だったため、一般公開は九月となっている。それまでのテストプレイという名目で、一機が俺用に用意された。一応社用なので、燃料や整備にかかる費用はデュノア持ちだ。
レース仕様の本機だが、乗用車としても販売する予定なので、来年の今頃は街中を多脚ちゃんたちが闊歩していることだろう。ムフフ、楽しみだ……。
受付で手続きを済ませると、案内するというスタッフの声も制止も無視して、俺は赤と白の幾何学迷彩にいろどられたスタリオンを走らせた。

◇◇◇

体育館には全校生徒が集められ、新入生を迎える入学式が執り行われる中、そいつは突然現れた。

赤と白のカラーリングの、四本脚の機械。滑らかに床を滑り、飛び跳ねてステージに上がると生徒会長としての祝辞を述べる私のすぐ傍で停止した。妙に生物的な動きをするそれに、私を含め会場にいる者全員が呆気にとられていた。

圧縮空気の抜ける音と共に、中から機体に負けず劣らずの鮮やかな赤髪をした男が姿を現し、演説台のマイクをかっさらうと左手で体育館の中心を指差し叫んだ。

「レヴァン・デュノア、ただ今見参！」

◇◇◇

素晴らしい。皆が俺を見て唖然としている。テレビで連日連夜放送されている生レヴァン・デュノアだしな、当然か。おかげキサラギの宣伝もバッチリだ。

自慢じゃないが俺は大勢の前で話すのには慣れている。キサラギのメンバーが一同に会しての演説とか普通にやってたしな。一六歳になってからは正式にキサラギのリーダーやってるし。

「俺こそ今世界で話題のフランス代表候補生、レヴァン・デュノアだ。人類の半分の頂点に立つ人間だ。この学園の第三学年に編入することになった。一つ、よろしく頼むぜ」

歓声、特に二年三年の方から。何かアイドルにでもなった気分だ。アイドルだが。

これでもイケメンなんでね。長く伸ばした赤色の後ろ髪を結わえて流している。サラサラのそれは、風になびけばさながら炎のように映ることだろう。

頃合いを計り、さっきから一部が注目している多脚ちゃんに話題を変える。

「こいつは我がキサラギが心血を注いで開発した有脚車両、その名も『スタリオン』だ。岩山から高速道路まで、ありとあらゆる地形を走破できる新世代レーシングマシン。勿論、乗用車としても販売する予定だ。楽しみにしててくれ。内の多脚戦車とシステムは同じだからな、初めてでも乗りこなせる」

興味津々ってところか。ＩＳ学園の卒業生というと俺の編入する三年生が第一期生になるから、今ここにいる生徒の将来的な就職は人手不足のＩＳ関連か、そうでなくともそれなりにグレードの高いところになるだろう。今の内に宣伝しておいてやるさ。

俺がスタリオンのフレームを撫でていると先ほど俺がマイクを引ったくった女子生徒――俺以外は皆女子だが――が俺の襟を取ろうと掴み掛かってきた。不意討ちのつもりらしい。

しかし俺は半身を反らしてそれを躱し、逆にその腕を取って投げ返す。女子生徒は受け身を取って即座に立ち上がると、言った。

「――今すぐステージから降りて着席しろ、そのオモチャも一緒にな」

オモチャ言うなし。

俺は少しカチンときて、眉間に若干のしわを寄せて挑発する。

「ご挨拶だな。女の言うことには男は従えってか？」

「生徒会長として言っているんだ。祝辞の邪魔だ、馬鹿者が」

正論だが、随分と口汚い生徒会長だな……うん、待てよ？　ＩＳ

学園の生徒会長と言えば確か――

「――生徒会長……お前、もしかして織斑千冬か？」

「だったら何だ、怖気付いたのか？」

何とまあ面白い偶然もあったもんだ。適当に突っ込んだらジャストタイミングでかの織斑千冬と出くわすとは。

「いんや……むしろ好都合だ」

俺は三日月よりも鋭く笑うと、マイクも捨てて言い放った。

「織斑千冬っ、俺と戦え！　勝った方が生徒会長だ、それで文句ないだろ！」

織斑千冬の使用する専用ＩＳ『暮桜』はキサラギの仇敵、篠ノ乃束が手懸けた機体だ。その打倒を目指して作られたのが俺の『ラファール・カスタム』であり、半ば対『暮桜』用のＩＳとも言える。俺だってこの数年間、研究だけしてきた訳じゃない。フランスにあるＩＳすべてを一度に相手して撃破するくらいの実力はある。俺は万能の天才なのだから。

現生徒会長は一瞬驚いたようだがすぐに目を細め、よどみない凛とした声色で答えた。

「いいだろう、受けて立ってやる！」

最強の男女の雌雄を決する戦いが始まった。

ｓｅｃ．０６／雌雄（後書き）

次回はレヴァンと千冬の決戦。刮目せよ（笑）

ｓｅｃ．０７／キサラギと束、レヴァンと千冬（前書き）

千冬さんはこの時点で零落白夜は習得してません。

ｓｅｃ．０７／キサラギと束、レヴァンと千冬

ピットを抜け、俺のＩＳ『ラファール・カスタム』が飛翔する。脚部の双発スラスターが唸りを上げ、機体を一気に押し上げた。

大雑把（おおざっぱ）なギザギザで構成された赤と白の幾何学迷彩。肩に可動式アームで固定された一対の盾にはデュノアの社章とキサラギのエンブレム、それから俺、レヴァン・デュノアの赤い鷹のエンブレムが印刷されている。

右腕にはキサラギの男たちが総力を上げて造ったパイルバンカーが固定され、左手はドラムマガジン式の一二．七ミリ機銃のグリップを握り締めている。タランテラの機体下部に取り付けるためのものをＩＳ用にマイナーチェンジした代物だ。パイルバンカーには刃渡り八〇センチほどの大振りのナイフが取り付けられていて、継続的な近接戦闘が可能だ。

俺が第一アリーナの戦闘初期位置に到達すると、反対側のピットから赤い機体が姿を現した。

「『暮桜』……同志たちよ、ついにこのときが来た。キサラギの力を世界に示すときが！」

先日の宣戦布告からすでに一ヵ月がたち、アリーナに集う聴衆たちは待ちきれないとばかりに熱狂していた。

俺たちの決闘は認められたものの、非公式試合での損傷で後の公式戦に響いてはことだからと一ヵ月先延ばしにされ、クラス対抗戦で決着を付けることになった。大方男女の最強同士が戦うこの試合を非公式にしておくのはもったいないと判断したのだろうが。

結果、俺は当初予定されていた一組を外れ、隣の二組に配属されることになった。二組の連中がはしゃいでいたとだけ言っておこう。同郷で俺のファンだとかいう奴もいてちょっとばかし大変な目に合

ったが。
ちなみに今日まで間、虎の子のパイルバンカーは一度も使っていない。秘密兵器だからな。
マスコミやお偉いさん、ついでにキサラギの人間――と言うかエラ――が見守る中、『暮桜』が所定位置に着いた。『ラファール・カスタム』のスポーティーなモンザレッドとは違い、血のようなワインレッドの機体色。いまだ実用化されていない非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が採用され、広い可動範囲から高い運動性が予想される。武器は右手の長刀――雪片というらしい――一振りだけというなんとも男気溢れる構成だ。そのセンスは認めよう、篠ノ乃束。
オープンチャンネルで俺は言った。

「俺が勝ったら生徒会長の座を頂こう。だが、それだけでは不公平だ。織斑千冬、お前が勝ったら、何でも一つ言うことを聞いてやる。まあ、ありえないがな」

「面白い。望みとあらば、小間使いにでもしてやろう。せいぜい頑張るんだな」

両者不敵に笑い、己が得物を構える。アナウンスが流れ、戦闘開始のブザーが鳴った。
俺は即座に上昇する。戦術の要はいつでも高度の高い方が有利だ。双発式のスラスターが機体を加速させ、瞬時に高度を稼ぐ。同時に左の一二・七ミリ機銃で牽制する。

「弾丸回避はお手のものってか」

『三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）』。向いている方向とは違う方向に加速しながら旋回する、いわば空中ドリフトターン。射撃回避と視界確保を両立した織斑千冬の得意技にして、現行のＩＳには不可能な機動だ。

俺は『三日月返り（クレセント・サルト）』で鋭い宙返りを打ちながら、両手で機銃を構えて発砲した。
突然の機動変更に反応しきれなかった織斑千冬を多方向からの銃弾が襲う。
「私相手に啖呵を切っただけある、か……」
オープンチャンネルで聞こえてくる声を軽く無視しながら、『ラファール・カスタム』でサテライトする。付かず離れずのＩＳ射撃術の基本だ。再び高度を取ろうと上昇するが、相手も伊達に生徒会長をやっている訳ではないらしい。被弾を顧みずに『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を使ってきた。
「――ヤァッ！」
ギィン！
気合いの入った声と共に神速の居合いが炸裂する。盛大に火花を散らしながら何とかパイルバンカーに付いている大型ナイフでいなすが、重い。
案の定、返す刀で放たれた面を殺すことはできなかった。
斬ッ！
ナイフに沿って滑る雪片の刃が、右肩の盾を根元から切り飛ばした。
――バリアー貫通、ダメージ５８、シールドエネルギー残量４４２。実体ダメージ、レベル低。

「っらぁ！」

残った左の可動盾で殴り付け、機銃を叩き込む。『暮桜』のシールドバリアーを削る瞬きに、歯を食い縛る織斑千冬の顔が見えた。きっと俺も同じ表情をしていることだろう。

『暮桜』はそのまま銃火を避けようと距離を取るべく上昇していった。

◇◇◇

このレヴァン・デュノアという男、なかなかの使い手だ。私の初撃を弾き、あまつさえ二撃目を反らした。目はいい。

右の盾を切り飛ばしてやった。それから右半身を攻めることで脚やスラスターなどに傷を付けるが、こちらもいくらかいいものを貰ってしまった。

『暮桜』のシールドエネルギー残量は二〇〇と少しといったところか。相手よりも幾分あるが、油断はできない。特にあの右腕のナイフ、まだ仕掛けがありそうな雰囲気だ。そうでなければあんな固定銃器のような持ち方はしないはず。

第一世代ＩＳはＩＳをスポーツとしながらも兵器らしい無骨なデザインが特徴だ。腕に火器が直接内蔵されたタイプのものが多い。

その中でも、デュノアの『ラファール』は丸腰で武器は後付けという変わった構造をしている。『暮桜』と同じで完全な人型をとっているのだ。束が前に後付装備（イコライザ）がどうとか言っていたが、他よりも先見的なデザインなのだろう。

「なるほど、強い」

オープンチャンネルでレヴァンの声が聞こえる。どことなく楽しそうな感じだ。そう思うと、自分もそれなりに興奮しているのに気付く。
いつにない強敵に心が弾んでいる。勝てると分かっている相手とやるのに慣れてしまっていたからか、久しぶりに戦いを楽しいと感じた。

「行くぞ！」

こいつを倒して、私はさらなる高みを目指す。
雪片の感触を確かめ、弾丸の雨を掻い潜りながら接敵する。
大丈夫だ、行ける。絶対防御を発動させることができれば、この雪片なら一撃で仕留められるだろう。何せ我が自重なき親友、篠ノ乃束が手ずから仕上げた業物だ。

「勝たせてもらうぞ」

左腹に構えて突きの体勢。銃弾が機体を穿つが気にせず瞬時加速を発動させる。
爆発的加速が景色を変え、相手の目の前まで機体を押しやった。

（この一撃で仕留る！）

初撃とは比べものにならない速さの突きが、『ラファール・カスタム』へと繰り出される。勝つまで勝ちは確信しない。油断はなかった。なかったが――

ギャンッ！

――止められた。

「惜しいな」

右手で止められた。雪片の刀身が深々と刺さっていた。

盾で殴ってくるのを刺さっている雪片で体勢を変えて躱す。そのままスラスター全開で渾身の回し蹴りを放った。

「ぐぅっ！」

見事レヴァンの胸板にヒットし、殺し切れなかった衝撃が肺の中の空気を押し出す。

「あぁぁぁぁあっ！」

伝達される回転力を右手に集中し、雪片を抜き取る。再度一回転し、勢いのままに雪片を逆袈裟に振り抜いた。やれる！

ニィ……！

レヴァンのどこまでも深い笑みが、見えた気がした。

◇◇◇

爆発。

逆袈裟に放たれた雪片の斬撃が左の可動盾を捕らえたとき、盾表面が大小の破片を撒き散らしながら爆発した。

対斬撃爆発反応装甲。

一定以上の衝撃が伝わると自動的に爆発し、破片を飛ばして反撃

する追加装甲。本来成形炸薬弾から戦車を守るために装備されるそれが、過剰な威力で『暮桜』の両手を吹き飛ばし、雪片をどこかへ追いやった。

織斑千冬は何が起きたのか分からないといった顔をしている。分かるのは馴れ親しんだ愛刀を握る感覚がないことだけ。

（俺の……勝ちだ！）

ここへ来てようやく出番の来た右腕のそれが、待ってましたとばかりに猛り、唸る。俺は壊れた右腕には見向きもせず、ただ眼前の敵を見据えて思いっきり振りかぶる。

キサラギが篠ノ乃束に、俺が織斑千冬に勝つために鍛えたパイルバンカーが、その内に秘めた多量の炸薬に点火し巨大な杭を打ち出した。

ｓｅｃ．０８／スカウト

『暮桜』が落ちていく。織斑千冬が落ちていく。機銃で巻き上げられた粉塵がいまだ舞う地面へ。
盛大に土煙を上げながら、『暮桜』は墜落した。
アリーナの聴衆が沸き立つ。常勝無敗の織斑千冬がついに敗れた。
篠ノ乃束のＩＳがついに敗れた。
俺は、言葉もなかった。ただ、雄叫びを上げた。
「ウオオォォォオ！」
レヴァン・デュノアは、キサラギは勝利した。
人類最強の名は、今、塗り替えられた。

◇◇◇

わずかな揺れに目を覚ます。馴れ親しんだ『暮桜』の感触はない。
代わりに少し固めの腕の感触を背中に感じた。
「起きたか」
目の前の鮮烈な赤髪は……レヴァン・デュノアか。そうか――
「――私は、負けたのだな……」
意識を失う直前、ハイパーセンサーによって遅滞した世界で最後

に見たものを思い出す。
警戒していた右腕の武器から巨大な杭が発射されていた。人の腕ほどもある太さで、先端は鋭く尖(とが)っていた。
『暮桜』のシールドバリアーを突き破り私に到達する直前、杭は爆発しオレンジ色の奔流が私の身体を叩き付けたのだ。そこで私の意識は途切れた。

「成形炸薬弾……」

「そういうことだ」

モンロー・ノイマン効果とか言っただろうか。早い話が耳元でメガホンを使って怒鳴り散らすようなものだ。爆発力を一点に集め、貫通力を増す、戦車砲弾に使われる弾種の一つ。オレンジ色の奔流はメタルジェットか。マッハ三、摂氏三〇〇〇度の液状金属。
あれで絶対防御が発動し、二〇〇ほどあったシールドエネルギーが一気にゼロになったらしい。となると『暮桜』もボロボロだろうな。束はどんな顔をするだろうか。

「あの杭は使い捨てだったのか……」

「一撃必殺の武器に二発目はいらないだろ？」

「その極端な思考のおかげでこの体勢か。私も堕ちたものだ……というかさっさと下ろせ馬鹿者っ」

「馬鹿はお前だ。まだ立てないくせに」

「むぅ……」

私は今、この赤髪に横抱きにされている。世に言う『お姫様抱っこ』なるものだ。まったく忌々しい。誇り高き織斑千冬の身体を抱き上げるなどと……。
しかし、指一本動かないのも事実。多少無理をすればもがくくらいできるかもしれないが、何となく気だるくて疲れている。

「仕方ない、保健室までは付き合ってやる」

私がそっぽを向くとレヴァンは不敵に笑って返した。

「何言ってるんだ。お前には一年間、生徒会副会長として付き合ってもらうぞ」

予想外の発言に一瞬混乱するも、女性最強の称号から確かに妥当だと納得する。
疲労と変な安心感から途端に眠くなって、私は一言残してレヴァンの胸に頭を預けた。

「食えない男だ……」

◇◇◇

「私の『暮桜』がーっ！」

格納庫では篠ノ乃束が奇声を発していた。あれが世界のカオスの中心か。何か今まで抱いてきたライバル心を根こそぎ萎えさせるリアクションだ。
見てみれば、そこに安置された『暮桜』は清々しいくらいにボロ

ボロだった。絶対防御の発動しなかった部位にパイルバンカーのメタルジェットの残骸がこびり付いている。
俺は背後から歩み寄り、束のサラサラの黒髪を湛(たた)えた頭に手を置いて言った。

「済まないなぁ、ブッ壊しちゃって。まあ俺も中破だから相子ってことで――」

ヒュンッ

――パシッ

右の平手が飛んできたが、俺は左手で手首を取って止める。とすかさず今度は左が飛んできて、右手で止めた。
束の目は微かに潤んでいた。平手が飛んできたときは一瞬イラッとしたが、何だか馬鹿らしくなって俺は気を静める。手首は握ったままだが。

「放してよ」

「放したらぶつじゃん」

「……」

束の目付きが冷たくなる。心の中でどれだけの罵詈雑言が渦巻いているか知らないが、その目は明確な敵意を示していた。
まあ、だから何って感じだが。

ぎゅー。

試しに交差していた腕を伸ばしてみる。俺の腕が開かれると同時に束の腕が交差して引っ張られる。間にある豊満な双丘が潰れて際立って見えた。

「眼福……」

「死ね、変態！」

ゴッ……！

「うぅっ」

束の膝が正確に俺の金的を捕らえた。脚部損傷。ＡＰ五〇パーセント、機体ダメージが増大しています。

束は目を一層うるうるとさせて自分の肩を抱いて拒絶を示す。ちなみに束殿、変態はキサラギメンバーには誉め言葉です。覚えとけ。

「とまあ、お遊びはここまでだ。よく聞け篠ノ乃束」

数秒で復活した俺は、後ろで結わえた赤髪を一撫でして続けた。

「現時刻をもって、お前を生徒会会計に任命する」

束は意味が分からないといった表情で拒絶する。

「は？　やらないよそんなの、興味ないしね」

「いや、やってもらう。会長権限だ」

俺もすかさず言い放った。

「そもそも私に命令できる立場なのかな君は」

「少なくとも敗者のお前よりかは上の立場のはずだが」

互いに毒を吐き合う。しかし明らかに俺が優位だった。今の束から感じるのは嫌悪、敵愾心、拒絶。対して俺の中にあるのは余裕、打算、加虐心……おい最後の奴は何だ。

とにかく、俺の方が切れるカードが多いって訳だ。

束は俺の言葉にむっと顔をしかめて言う。

「あーあ、これだから欧米人は詫び寂びが分かってないって言うんだよ。拒絶してるのにずかずか土足で入ってきてさ」

ほら、切れるカードがなくなってきたから中傷に走って相手を遠ざけようとする。レヴァン・デュノアになる前の俺とそっくりだな。お前の考えてることは全部お見通しだ、篠ノ乃束。

言っておくが、ずかずか入ってきてくれる人がいる内は幸せなんだぜ。

何か可愛くなってきたな……。加虐心を外して同情を加えておいてくれ。

「欧米は靴を履いたまま家に入るからな。と、そんなことはどうでもいいんだ。生徒会に入らないとなるとどこかの部活に見張り付きで強制参加させることになるんだが……」

「この二年間束さんは帰宅部だから」

「よし、なら会長権限でたった今から帰宅部は廃部だ。生徒会に入れ、織斑千冬もいるぞ」

「ちーちゃんが？」

これが一番強力なカード。『千冬もいるぞ』だ。またの名を『入らなかったら独りだぞ』。

案の定束は思考している。まあ、答えは分かっている。もう一押しと言ったところか。

「……サボってもいい」

「しょうがないね、それなら束さんの出番だよ」

……。

何かよく分からん娘だ。

まあいい、端から篠ノ乃束に事務能力なんぞ求めてはいない。知りたいのは人格。一緒に過ごせれば俺はそれで満足だ。『暮桜』に勝つって目的も達成されたことだしな。今頃キサラギの連中は狂喜乱舞しているだろう。

「じゃあ毎日生徒会室に来な、好きにしてていいからさ。部屋に籠もってると虫になる」

俺はそう言い残して踵を返す。すると束が『ねぇ』、と呼び止めてきた。

「データとらせて」

「しゃーないな……」

そう言って、俺は待機状態のＩＳ、首の赤いチョーカーに手を触れた。

ｓｅｃ．０８／スカウト（後書き）

真耶さんはもう少ししたら出てきます。

ｓｅｃ．０９／真耶、生徒会への道（前書き）

登場は大分先ですが、シャルロット専用ＩＳのデザインが完成しました。
あらすじのＵＲＬからイラストページにいけます。名前募集中です。

ｓｅｃ．０９／真耶、生徒会への道

私は千冬先輩に憧れていました。
強くて凛々しくて、厳しいけど優しくて、どこか儚げな美しさを纏った人。
私はクラス代表だったから、生徒会長の彼女に幾度となくお世話になった。

「今まで一度も負けたことなんてなかったのに……あの人は何なんだろう」

男性でＩＳを使えるという人が、千冬先輩に勝ってしまった。それは男性だからとかじゃ全然なくて――千冬先輩もそんなので負ける人じゃない――確かに実力があって、情報戦なんかも引っ括めた末の勝利だっただろう。
ただ勝つために、自分を鍛え武器を鍛え、策を練ってひたすらに強さを求める。そんな彼の姿を幻視して、思わず胸が熱くなった。

「レヴァン・デュノア先輩……私の新しい生徒会長……」

って何言ってるんだろう私……！　『私の』だなんて……『私の』、だなんて……。

「私のものに、ならないかな……」

思わず口をついて出てしまった言葉に赤面する。うわー！
彼のことを考えると、とたんに胸が苦しくなる。話したこともないのに、テレビのニュースと入学式のときとアリーナで見たきりなのに。でも堂々としていて格好よかったな……て、そうじゃなくて

ね！

「それで、ピキーンときた訳だ？」

「うん、まあ……」

ルームメイトの娘が興味津々で追及してくるのに、私はつい頷いてしまう。

「ふーん、まさかあんたがねー。真面目腐ったいいんちょさんでも恋はするもんなんだね」

「こっここここ、恋！？」

「だってそうでしょ、ピキーンときちゃったんでしょ？　それは一目惚れだよ一目惚れ！　目と目が合ったその日から～とか言うやつ」

「……」

神奈川のお父さん、お母さん、あなた方の娘の真耶は恋をしてしまったようです。

◇◇◇

「人手が足りない！」

生徒会長になってから約一週間。教室移動のたびに追っかけてくる各学年の生徒たちを躱したり、『レヴァン会長観察記』とか言っ

て毎日インタビューに来る新聞部のパパラッチから逃げたりと壮絶な日々を送っていた訳だが、唯一の平穏の場である生徒会室ですら俺に安息はない。

「何でこんな紙媒体の情報を整理しなきゃならないんだ……」

「仕事だからだ」

それを言っちゃあお仕舞いだろう千冬さん。

俺は紙の山に突っ伏して言った。

「俺は隠居するから後やっといてくれ……」

「責任と覚悟があってその椅子に座っているのだろう、レヴァン。男なら弱音は吐くな」

「さすがは男より男らしいと評判の織斑千――」

パシンッ！

「っつぁぁあ！」

痛い……。千冬がクリップボードで叩いてきた。通算一七回目だ。まったく、こいつは叩き癖でもあるのか？

「そして束はなぜ手伝わないのか、と」

「サボっていいって言ったのはそっちだし？」

「つくづく間抜けだなレヴァン。お前は何がしたかったんだ？」

二人が冷たい。他の女子は俺にキャーキャー言うのにお前らときたら、すぐぶつし、協調性ないし、そのくせ見た目は可愛いしで俺はどうしたらいいんだ！

いや待て待て、俺は今まで女っ気のないところで変態共に囲まれて育ったから女子に慣れてないだけなんだ。この恐怖の大王と世界のカオスの中心が可愛いなどあるはずがない。

「どっかに事務能力高そうな奴いないか？　俺はキサラギだし千冬はブレオンだし束はサボり魔だし、俺たちに事務能力とか望むのがまず間違ってるだろ」

「君が選抜したメンバーだけどね」

相変わらず束は目を合わせないでパソコンをカタカタやっている。別に目を合わせてもらっても眠気が移るだけだがな。

「レヴァン、ブレオンとは何だ？」

「は？　『ブレードオンリー』の略に決まってるだろ」

「……」

何だそのシラーっとした目は！　束、目を合わせてくれるのはいいがその目はダメだ！

「君って本当にフランス人？　中身は日本人じゃないの？」

束が呟く。何この娘、察しがよすぎるだろ。ていうか何か最初より態度が軟化しているような……まあいつまでも毒吐いてても疲れ

るだけだしな。基本俺から話しかけることはないし。当て擦ることはしょっちゅうだが、言われたままじゃいられないんだろう。それでついつい言い返してる内に警戒が解けていったか。さすが俺だな。

「少なくともこの髪は地毛だ。――で、人手不足をどうするかだが、私にいい考えがある！」

突然の俺の一人称変更にまたもシラーっとした視線を向けてくる巨乳二人組。だが俺には通用しない。

俺は人手不足解消のための秘策を懇切丁寧に説明してやる。

「事務能力高い奴ってのは真面目腐ったいいんちょさんタイプと相場が決まっている。筆記試験をしてトップだった奴、学年合わせて三人だな、そいつらと俺が三対一で戦う。最初に俺に一撃入れた奴が生徒会書記に見事抜擢！　どうだこれ？」

俺の素晴らしい提案に千冬が顎を押さえて唸っている。俺のすごさを思い知ったか巨乳剣士。分かったら揉ませろ、いや勿論冗談だぞ。そんな冷たい目で俺を見るなよ、悲しくなるだろ。

「それはいいが、ＩＳ戦で低学年が不利にならないか？」

「学年が低いほど銃の連射速度が速くなるよう手を入れよう。後は知らん」

「まあそれならいいか」

俺たち――約一名を除く――は動きだした。

◇◇◇

生徒会、レヴァン会長から新たな告知が来た。生徒会書記を募集するらしい。

参加者に筆記試験を受けさせ、学年トップ三人と三対一で戦って最初に一撃入れた人が書記。実力だけでなく運を味方に付けないとなれない倍率百倍を裕に超える狭き門だ。

それでも、このチャンスを諦める訳にはいかない。これは山田真耶がレヴァン・デュノアに近づくための第一歩なのだから。

そして今から筆記試験が開始される。

「やってやるんだから」

私はパンッと頬を張って問題に取り組んだ。

最初の方は普通のＩＳ関係のテストだ。授業で習った範囲をしっかり復習している私にはすらすらと解ける。これならイケると思ったら、途中から出題傾向ががらりと変わった。

『レヴァン・デュノアの誕生日と血液型は？』とか『デュノア社の最初の搭乗型多脚ロボットの名称は？』とか、何だかレヴァン会長自身にまつわる問題ばかりだ。

勿論、『レヴァン会長観察記』を愛読している私にはこんなの簡単すぎる問題だ。誕生日は四月九日、血液型はＢ。ロボットの名前は『Ｘ－アレニエ』。

（今の生徒会はレヴァン会長に千冬先輩に篠ノ乃博士だったよね）

こんな問題が出る背景には何かがあるはずだと思考する。ふと見てみれば、レヴァン会長に関する問題のウエイトが結構あるのに気付く。

（そうか！　レヴァン会長はきっと二人に理解してもらえてないんだ。だから自分のことをより知ってる人に生徒会に来てほしいんだ！　そういうことならこの私に任せてください、必ず癒して見せますから！）

私は超直感を働かせながら問題を解いた。

ｓｅｃ．０９／真耶、生徒会への道（後書き）

真耶さんの出身地は適当に決めました。
次は三対一戦ですね。

ｓｅｃ．１０／山田書記官（前書き）

真耶さんのキャラ崩れるかも……。

ｓｅｃ．１０／山田書記官

三機のＩＳが赤と白の幾何学迷彩に追いすがる。
私、山田真耶は今までで一番白熱した空中戦を行っていた。
私は見事筆記試験を通過し、二次試験に挑戦していた。ＩＳ戦でレヴァン会長に一撃入れるのだ。私と三年生の人はデュノア製ＩＳ『ラファール』を纏い、一年生の娘は日本製の『襲（かさね）』を使っている。どうやら専用機持ちらしかった。
一年生の娘は近接ブレードと左腕に固定された機銃を使っているけれど、『ラファール』の私たちはライフル一丁のみ。私の方が発射速度が若干速いらしいけど正直あまり実感はない。

「私、不利じゃないかな……」

でもレヴァン会長の『ラファール・カスタム』にはどれもかすりもしないのだから大した差はないのだろう。
千冬先輩との戦いでは作戦勝ちなところもあったけど、彼は間違いなく強い。彼自身、自分の乗る機体の開発にたずさわったのだから特性も何もかも把握しているはずだし。
レヴァン会長の移動ルートの未来位置を狙って発砲する。

「そこっ」

当たらない。
私が引き金を引く瞬間に軌道をずらしてくる。弾が発射される頃にはそこにいないのだから当たるはずもなかった。

「何で分かるの……？」

ＩＳ操者には三六〇度視界が見えているけど、人間の脳を使う以上注意を全方向に向けることはできないから、必ず死角が生まれる。彼はそれすら完璧にカバーして見せ、全弾を回避している。

「本当に人間なのかな……あれ？」

人間でなければ可能かもしれないと思ってから、私は気付いた。レヴァン会長は多脚戦車開発の中心にいて、その多脚戦車は『ネクサス』、つまり『神経精密同調システム』で操縦するはずだ。そしてその多脚戦車は“全周囲索敵で敵を捕捉、反射的に撃滅する”。

「そっか、『ラファール・カスタム』には『ネクサス』が積まれてるんだ！」

なら通常のＩＳの索敵システムとは異なるやり方で周囲を観測しているはずだ。つまりはＩＳのハイパーセンサーとネクサスによる全周囲均一監視、“連携のない散発射撃が当たるはずもない”。

「なら、射撃はダミーだよね」

そうか、分かりましたよ。レヴァン会長も人が悪い。端っから当たってやるつもりなんてなかったんですね！

「そういうことなら私にも考えがありますからね！」

私は照準を止め、一気に上昇。高く高く上っていく。大体四〇〇メートルほど上昇すると宙返りを打った。

ライフルを捨て、眼下の赤と白の機体を見据える。チャンスは一度きり。

「今行きます、レヴァン会長！」

『ラファール』の脚が砕けるかというほどの出力で、私はスラスターを吹かした。

「いっけぇぇぇぇ！」

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を連発、連発。あっという間に音速を超え、ものすごい速さで地面が迫ってくるけど怖くはなかった。『ラファール』はレヴァン会長の作ったＩＳだから、彼に包まれていると思うとむしろ安心さえした。

後一〇〇メートル。ミサイルのように突貫してくる私をよけようとするけど、〇．三秒じゃあ無理というもの。逃がしませんよ。

「ぐはっ！」

私は超音速でレヴァン会長に抱きつくと、減速もせずにそのまま地面へと向かう。

ドオオォォォオン！

一〇〇キログラム級のダイナマイトと同じだけの土煙を巻き上げ、私たちはクレーターを作った。

私の下敷きになっているレヴァン会長が苦しそうに呻く――って何胸に顔埋めてるんですかっ、あ……いやっ……。

「もう……こんな大勢の前で……つ、土煙が晴れるまでですよ？」

「――ぷはっ、お前は何盛大な勘違いをしてるんだ！」

うわうわ、生レヴァン・デュノア会長が話し掛けてきてくれました！　口ではそう言いますけど、背中に手を当ててるの知ってますからね！　結構感触楽しんでるじゃないですか！

「レヴァン会長！」

「お、おう……」

突然名前を呼ばれて少したじろぐレヴァン会長。胸の感触を楽しんでるのを指摘されたと取ったのか、私の背中にさりげなく回していた手をどける。別に怒ってないんだけど……。

「わ、私があなたの書記ですっ……」

赤面しながらもしっかり目を見て宣言する。彼は一瞬驚きながらも、私の髪を撫でて優しく言った。

「……ああ、これからよろしくな、真耶」

あーうー、そこで名前呼ぶのとか反則でしょう！　この人もしかして私の気持ちに気付いてる？　とか思っちゃうよ！

私は何だか嬉しくなって、自分でもこんなことするのはびっくりだったけど、彼の頭を掻き抱いて返事をした。

「はいっ！」

◇◇◇

「生徒会メンバー諸君、今日は我らの新しい仲間を紹介しよう！」
キサラギでの演説と同じ乗りで俺は言う。いつも通りシラーっとした目を向けてくる二人は織斑千冬と篠ノ乃束だ。どうやらこの乗りが気に入らないらしい。
だが俺はめげない。俺は周りに合わせて自らのアイデンティティーを誤魔化すような小さい男ではない。
「入ってきてくれ」
「は、はいっ！」
扉の向こうから小柄な女の子が入ってくる。返事は上ずっていて緊張しているようだ。束は早くも興味をなくしたとばかりにパソコンへと視線を移す。
「えっと、この度生徒会書記になりました山田真耶と言います。ふつつか者ですが、よ、よろしくお願いします！」
「二年三組のクラス代表の山田君だな、知っているだろうが形式上私も名乗っておこう。副会長の織斑千冬だ、よろしく。そっちでパソコンを弄っているのが会計の篠ノ乃束だ」
「あ、はい……よろしくお願いします……」
さすが元生徒会長。千冬はてきぱきと自己紹介を済まし、自分の書類に戻った。だが新人相手にそれは少し配慮に欠けるというものだ。
俺は微妙な空気を感じて涙目になりかけている真耶の肩に手を置

くと言った。

「そう緊張しなくても大丈夫だ。二人共クセの強い性格だが、悪い奴じゃない」

「はい……」

少し顔が赤い。やっぱり俺に気があるのかもしれないな。まあ真耶が真面目ないいんちょさんであることは調べがついてるし、ＩＳ戦でのあの思い切った行動や後の言動を見るに俺の下に付きたかったみたいだし。

だが今は保留だな。今大事なのは彼女を生徒会に馴染ませることだ。

「千冬のことは知ってるんだったな」

「はい、厳しいけど優しい人です」

「そうだな、すぐクリップボードでぶつけど、何だかんだ言って最後まで手伝ってくれるから面倒見はいい方だ」

尊敬する相手を褒められて嬉しいのか真耶の顔に笑みが戻る。千冬も何だかむず痒そうにしている。

「束は人見知り激しいけどよく見ると可愛い奴だから嫌いにならないでやってくれ」

「……人見知りじゃなくて束さんは他人に興味がないだけなんだけどね」

束が呟く。人見知りと言われたままにしておくのは癪だったらしいが、言い返してる時点で人目を気にしてるのは丸分かりだから可愛いもんだ。

「そう納得することで自分の世界を守ってるんだろ？　安心しなって。俺も真耶も、お前のことは全面的に肯定してやるから。生徒会の仲間だろう」

「……」

束はぷいっと背中を向けてしまった。言い返さないってことは必ずしも俺の言う通りではないが、そう納得したければ勝手にしろってことだ。

まあ何とも、可愛い奴じゃないか。

俺は一つ苦笑しながら、束の背中を見ていた。それから真耶の方に向き直り、手を差し出して言った。

「ようこそＩＳ学園生徒会へ、君を歓迎しよう」

ｓｅｃ．１１／束の気持ち、レヴァンの野心

生徒会メンバーが揃ってしばらく、六月も暮れの学年別トーナメント。全校生徒強制参加なこのトーナメントは一週間丸々使って行われる。四〇〇人足らずの学生がＩＳで戦闘し、その実力を測るのだ。

一対一が前提なのでその総試合数はおよそ七〇〇というすさまじいトーナメントだ。一年生から三年生までが学内に三つあるアリーナでそれぞれ戦う。一週間という期間が確保されているものの、そのスケジュールは過密の一言である。

そのトーナメントもいよいよ大詰め。俺はトーナメントを順調に勝ち上がり、今は決勝。案の定勝ち上がってきた千冬と対峙している。

俺の専用ＩＳ『ラファール・カスタム』には多脚戦車に搭載されているものと同じ『神経精密同調システム』、通称ネクサスによって操縦が補佐されているため、脳にＩＳが情報を送り込んで理解しなおすというプロセスなしにハイパーセンサーの情報を取得できる。そのためデジタルに外界を認識でき、射線予測や射撃の精度は他の追随を許さない。

この圧倒的正確さをもってして、所詮マニュアル操作の通常ＩＳを降(くだ)すなど造作もないことだった。見事なキサラギの勝利だ。

しかし千冬は別格だ。模擬戦で何度も戦っているが、勝率は二割と負けている。手の内が分かった時点で対策を立てられ、なかなか思うように戦いが進められないのだ。雪片で押し切られるか、何とか逃げて削り切るかといったところである。

そしてこれから真剣勝負。いつもとはお互い気迫が違う。

「この戦いで優劣を決めるとしよう」

「測るまでもない。勝つのは私だ」

試合開始のブザーが鳴り響いた。俺は開始すぐに急降下する。飛び上がるより二Gだけ余分に加速力を稼ぐことができる。

そのまま一回転して上を見る。天地が逆転した状態で一二・七ミリ機銃を発砲した。ネクサスで外界を認識しているため地面との距離も正確に把握できる。

千冬が俺の後に続いて降下する。ローリングとヨーイングを巧みに使い分けて弾丸を躱すが、完全な引き撃ち体勢に躱しきれない弾がシールドバリアーを削る。

「男なら立ち向かって見せろ！」

「正面から挑むのは愚の骨頂ってもんだぜ！」

地面すれすれでターンして地上を滑るように移動する。その間も機銃のトリガーから指は放さない。

地面に脚を着いてクイックターン。半円状の溝を刻み、千冬はそのまま俺を追い越して行った。その背中向けてもう一射撃。

「踊れよ！」

地面が回避の邪魔になると判断したのだろう、千冬は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で急上昇していく。

『瞬時加速』時は旋回半径が広くなる、つまり小回りが聞かなくなるため後ろに付ければ有利になる。俺も『瞬時加速』で千冬を追った。

「やっと来たな」

「……チッ」

千冬は『暮桜』の『非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）』を進行方向に構え、再度『瞬時加速』で俺に向かって突撃してきた。

ギィィィンッ！

機銃で狙う間もなく、『暮桜』の近接ブレード雪片と『ラファール・カスタム』のパイルバンカーに取り付けられた大型ナイフがつばぜり合いを起こし、派手に火花が散った。

「追い駆けっこではつまらないだろう」

「嫌なら銃使えっての！」

『ラファール・カスタム』の肩に取り付けられた二つの可動盾が『暮桜』の『非固定浮遊部位』を挟み込み、体勢を崩させる。雪片をはねのけると、俺はここぞとばかりにパイルバンカーを振り抜いた。

「毎度同じ手は食わない！」

「なっ！」

高速で射出される杭とタイミングを合わせて、『暮桜』の脚部スラスターが唸り千冬は前方宙返りした。いまだ実用化に至っていない『非固定浮遊部位』だからこその芸当か。

「セイッ！」

雪片の一閃が『ラファール・カスタム』の盾を支える二本のアームを切り裂いた。

――バリアー貫通、ダメージ１０８。シールドエネルギー残量、３９２。実体ダメージ、レベル中。

◇◇◇

季節は梅雨明け。夏の暑さが本格化する頃、私、篠ノ乃束は誰もいない生徒会室でパソコンを弄っていた。

先月末の学年別トーナメントは結局盾を斬り飛ばされた赤髪がずるずるとみっともない敗北を喫し、いつも通りちーちゃんの優勝に終わった。

やっぱり束さんとちーちゃんのコンビは最強だね。クラス対抗戦では作戦勝ちを許しちゃったけど、まあ今さらだろう。

ちーちゃんはそれから赤髪を自分の訓練に連れ回しているみたいで私にはあまり構ってくれない。実にムカつくね。でもちーちゃんも勝つか負けるかの戦いがしたいらしいから、強い敵がほしいのも分かるんだけどね。

あのデュノアの赤髪、やたらと私のことを可愛いと言うけど心から思っているかは不明だ。

でも急に生徒会室がすっからかんになると何だか違和感があるね。いつもは誰かがいて紙をめくる音やペンを動かす音がする。ついでに馬鹿の声も。いや、以前はそんな音も意識の外に追いやれたんだけど、ここに来てからは何か変で、ないと少し物足りない。

生徒会室にいろいろ運び込んで――というか赤髪に運び込ませて――部屋面積の半分は私の私用スペースになってるけど、あいつは何も言わない。

私のことを全面的に肯定とか訳分かんないこと言ってたような気がするけどその一貫なのかな。
ちーちゃんは部屋が狭くなるとか文句言ってたけど、生徒会長公認なら好きにできる。フランスから取り寄せたらしいお菓子もあるから束さん的にはアリかな。
まあ私としては害がないなら傍に置いておくのもやぶさかじゃない。お菓子くれるしね。

「束さんを餌付けする気か知らないけど、もはや私のいるところが生徒会室になってる状態だからどうでもいいんだよね」

しばらくするとちーちゃんたちが帰ってくる。赤髪は『ただいま』とか別に待ってたわけじゃないのに言ってくるけど、気にしない。
それから赤髪が紅茶を容れながら訓練でのことをちーちゃんと話す。あ、眼鏡もだっけ。

「『三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）』は今の可動盾の枚数じゃキツいものがあるなぁ。やっぱ四枚でないと」

「そうか、なら明日は別の機動を練習するか」

「そうだな、そうしてもらうと助かる……ん？」

――手が止まってた。
赤髪はそれに気付いたのか容れたての紅茶を私の前に置く。

「今日はアッサムティーだ。一段落付いたならどうぞ」

「……うん」

無駄に目ざとい……。
別に話し声を聞いてたわけじゃないんだからね。そう、一段落付いたのだよ。
そういう気で顔を上げると、なぜか赤髪はニヤニヤしながら私の頭を撫でる。人類最高の頭脳を内包した束さんの頭に触れるだなんて不敬にもほどがあるとはねのければ、大人しく手を引いて言う。

「束は今日も可愛いな」

この瞬間が一番鬱陶しい。何だかすべてを見透かされてる気がして視界から外れたくなる。
ぷいっと視線を紅茶にずらせば、赤髪はそこで退散していく。毎回このパターンだから、紅茶が赤髪の残した脱出ルートみたいで何か悔しい。
でもカップに口を付ければそんな気持ちも静まる。あいつの容れる紅茶は普通に美味しいから、それで許してあげることにした。

「……何で束さんがあんな赤髪のために思考を巡らせなきゃならないのかね。忌々しいよ本当」

私の呟きが聞こえたのか、ちーちゃんとの会話を中断して赤髪、レヴァンは言う。

「紅茶、どうだ？」

「美味しいよ」

忌々しい。この束さんが他人のいる部屋を居心地いいと感じるなんて、本当……忌々しい。

◇◇◇

シャワーを浴びてそろそろ寝るかとベッドに潜り込むと、専用機持ちの特権プライベート・チャネルで千冬が通信を入れてきた。

『まだ起きてるか？』

「ああ、起きてる」

口は動かさず、頭の後ろの方で会話するイメージで返す。ネクサスはこういう細かいシステムまではカバーしていないので、ＩＳを作った束のすごさが分かる。

「何だ？　訓練のことなら明日にでも――」

『いや、そうじゃない。束のことだ』

「束がどうかしたか？　いつも通りだったと思うけど」

俺は予想外の話題に眉を動かす。

『たいしたことじゃないんだが……いや、結構たいしたことか。束はな、昔から私と私の弟、それからあいつ自身の妹にしか興味がなくてな。他人には無関心で滅法冷たいんだ』

「だろうな」

『……率直に聞く。束に何をした？』

「穏やかじゃない聞き方だな」

『済まない、責めてる訳ではないんだ。むしろ嬉しくすら思っている。――生徒会室に限るが……ここ最近の束はあまり排他的ではないと感じてな』

ああ、そんなことか。それはそうだろう。自分にとって居心地のいい場所でリラックスするのは当然のことだ。

「束はさ、自分で自分のアイデンティティーを決め付けてるんだよ」

『決め付けている？』

「誇りを持ってると言ってもいいかもな。自分がどういう人間か、全部分かった気でいるのさ。他人に無関心なんじゃない。無関心でいようと努力していることに、自分自身気付いてないだけなんだよ」

『……』

少し分かりにくかったか。なら噛み砕いて説明してやろう。俺自身束のことを理解できてるわけじゃないがな。

「人ってのは絶対に独りじゃない、必ず繋がりを求めるもんだ。そういう本能がある」

『ああ』

「だから、本当に他人に無関心な奴なんていない。独りが好きとか大切な三人以外は興味ないとか言う奴は、単なる格好付けなんだよ」

『そういうものか？』

「そういうもんだ。大切なものは増えもすれば減りもする。俺は東にその辺悟らせてやりたいんだ。生徒会が東にとって居心地のいい場所になれば、きっと愛着も湧くしな」

『そうか……東には対等に相手のできる人間が増えてくれればいいな』

「お前も、だろう？」

『そうだな。今は私が一枚上手だが、対等になれるようしごいてやろう、喜べ』

「ったく、勘弁してくれ……お前みたいなのとだけは結婚したくないね」

『同感た。私もお前みたいな変態とだけは結ばれたくない』

「言ってくれる……」

『何だ？　本当は私がほしいのか？　やめろ、寒気がする』

「……上等だ。次こそ屈伏させてやりたくなった」

『フン、ここのところ敗戦続きのくせしてよく言う』

「……キャノンボール・ファストで俺が勝ったら、何でも俺の言うこと一つ聞けよ！」

『戦闘じゃ勝ち目がないからレースでか？　小物が。いいだろう、私が負けたら好きにしろ。そんな未来などないがな。私が勝ったら当然お前は言うことを聞くんだな？』

「無論だ。文字通り何でもしてやる」

『そうか、では楽しみにしていよう――』

通信が切れた。俺はニヤニヤが止まらない。

千冬、お前が勝つことは絶対にあり得ない。キサラギが今全力で新兵器を開発しているからな。

メイドコスでご奉仕させてやるから覚えてろよ！

ｓｅｃ．１１／束の気持ち、レヴァンの野心（後書き）

今回はフラグ回でした。
真耶ちゃんが空気……。

ｓｅｃ．１２／故郷の土（前書き）

スーパー束タイム！

ｓｅｃ．１２／故郷の土

「もうすぐ夏休みということで、日頃の労いを込めて諸君らをフランスに招待しようと思う」

終業式も間近の今日この頃、俺は宣言する。

突然何だとばかりに目を向けてくる三人は、珍しくまともな――自分で言ってて悲しくなるな――俺の発言に驚いている様子。

しかし詳細を話そうとする俺を遮って、いち早く立ち直った千冬が告げる。

「それは嬉しいが、気持ちだけ受け取っておこう。夏期休暇といえど、私は研究機関でＩＳ開発に協力しなければならないからな、時間が取れない」

うう、それは残念だ。と思っていたら真耶もどもりながら言ってくる。

「え、えっと……私も、家族で遠出する予定があるのでちょっと……」

俺の思い付きはことごとく駆逐される運命にあるのか……束は、来る訳がな――

「――どうしてもと言うなら、束さんは行ってあげないこともないよ？」

「あなたが神か……」

「……は？」

いぶかしげに見つめてくる束。千冬と真耶は浮遊大陸でも見たかのような顔をしている。

そうか、着てくれるか！　それならヘリもジェット機も手配した甲斐があったというものだ！

俺は束の両手をとってありがとうと告げる。

「何でお礼言われるか分かんないけど、三日くらいなら都合つけられるから」

「じゃあその三日で目一杯楽しませてやろう。キサラギにも寄るからな！」

◇◇◇

そして今は雲の上である。

「たかが旅行に何で自家用機を飛ばす必要があるのか聞きたいね」

「束は人混みは嫌いだろう？　それにこっちの方がくつろげるじゃんか」

ＩＳ学園からヘリで直接空港へ、そして超音速旅客機でフランスまでおよそ四時間だ。ちなみにこの旅客機、ＩＳの格納、整備ができるように改造されている。後部タラップから出撃もできるのは知られてはならない秘密だ。

「実を言うと今回のフランス帰省は仕事も兼ねてるんだよ。千冬と同じ理由だな」

「束さんがついてきてよかったの？」

「心配してくれてるのか？」

「別にっ」

束はそっぽを向く。可愛いよなあ、ツンデレうまうま。

「大丈夫だ、問題ない。俺には頼れる仲間がいるからな、三日くらいは女の子とのデートにかまけてられるさ」

束はいつも持ち歩いている浮遊ディスプレイ型のパソコンを起動すると、黙って作業に入ってしまった。俺は隣で一眠りしようと目を閉じた。

◇◇◇

資料館には試作型の多脚ちゃんがずらりと並べられていた。どれも完璧に整備され、制御ユニットと燃料を容れればすぐにでも起動できる状態だ。

フランスに着いて、そこからは街並みを見ながら車で移動。今はキサラギの本拠施設トライトンの資料館で多脚ちゃんを見学してもらっている。

「乗ってみたいものとかあるか？」

「じゃあ一番新しいやつ、いいかな」
「勿論だ。九月始めに一般公開するやつがあるぞ」
俺はシルバーの機体の『ＴＲスタリオン』――この中で唯一の実用モデルだ――のところに行き素早く準備を済ませると束を呼ぶ。後部ポッドが開きドライバーを迎える。
「ヘッドギアを着けて座ってくれ。狭いと思うけどリンクしたら気にならなくなるから」
「束さんのＩＳに比べて全然スマートじゃないね」
「それは認める。でも俺を含めキサラギのメンバーが情熱を捧げて造ったものだ。それなりのよさってものはあるはずだぜ」
「そういうものかな」
「じきに分かるさ」
束が乗り込んだのを確認して格納庫のハッチを開ける。
「俺も行くから先にトラックで待っててくれ」
『分かったー』
スピーカーから声を出して、『ＴＲスタリオン』は走っていった。
「さて、俺は学園から持って帰ってきたスタコンで走るか」

◇◇◇

君が代斉唱。
日本のある方を向いてキサラギのメンバーは客人の国の国家を歌う。
客人とはつまり私、篠ノ乃束だ。
多脚車両で一通り遊んでから、みんなで少し早めの夕食を採ることになった。私は静かに食べる方が好きだけど、今日ぐらいは騒いでるのを見ながらでもいいかな。
口々にどんなＩＳが最強かという議論が交わされてたけど、段々最強の意味が変わってきて――

「ＩＳも脚がたくさんある方がいいに決まってるだろ！」

「ＢＴオンリーこそ正義！」

――とか何とも間抜けな言い合いに発展してるのを見て、思わずクスリと笑ってしまった。頭はそれなりにいいはずなのに、馬鹿にしか見えない。
するとレヴァンが私の頬をつっ突いて言う。

「たまにはこんな空気もいいだろ？」

「……別に。こ、こんなの疲れるだけだよ」

「そうか？　でもあいつらの楽しそうな顔は、お前が作ったんだぞ。そう考えると、ちょっと嬉しくならないか？」

それは、そうかもしれないけど、私はあの人たちのためにＩＳを作った訳じゃないし。

「束がＩＳを作ってくれたおかげで、俺は毎日すごく楽しくすごせてるよ。生徒会の三人と出会えたのも、まるっきり束のおかげだしな」

「……そうかな」

「ああ、感謝してる。だから今日は楽しんでくれ、お前をもてなすパーティーなんだから」

そんな言い方って反則じゃないかな？　私がＩＳを作ったのはちーちゃんと楽しむためだったけど、こんな予想外のところから感謝されるなんてさ。望んでもないのに宴会まで開いて……。本当にずるいよ。

何か、いいかもとか思っちゃうじゃん。

それに篠ノ乃束に乾杯とかされるとさ、気恥ずかしいったらないよ。

「ちょっと風に当たりたいかな」

「分かった。エスコートしよう」

「もう……」

たくさん人がいるけど、私に話しかけてくるのはレヴァン一人。だから結構ゆっくりとはできるけど、さすがに落ち着かないから私は屋上に出ることにした。

「ねぇ……」

「どうした？」

「今日はありがとね。ほんのちょっと、君の気持ちが分かった気がするよ」

「そっか」

「うん……」

本当に、本当に少しだけだよ。まだまだ私には馴染まない。静かなのが好き。

けど、生徒会と似た雰囲気があるのは分かった。それは多分君の雰囲気。君の隣の空気だ。

私は少し体重をレヴァンに預ける。疲れたからだよ、きっとね。

「今日は疲れたね」

「……そうだな、部屋を用意してあるから行くか？」

ううんと首を横に振る。代わりに左腕に手を回して言った。

「……もうしばらくこうしてて」

「……分かったよ」

◇◇◇

束が俺の肩に頭をもたげる。人の温もりの一端でも実感してくれたなら、来た甲斐があった。
束は言ってないが、事前にメンバーとは束に対してどう対応するか――自分から話しかけないというだけだが――や君が代斉唱のこととかの打ち合わせを済ませていたのだが、実を結んで何よりである。
ふと近くの棟を見る。明かりが点いてない。キサラギのメンバーの多くが管理棟に集まってきていたが、それも一部だ。よく見ればあちこちので明かりが消えている。

「停電か？……いや、これは！」

「どうかしたの？」

この施設はテロ対策として非常電源が存在する。停電があれば三秒ほどで復旧するが、それが作動していない。ということは――

「敵襲か……！」

束の手を引いてすぐに会場に戻る。中はしんと静まり返っており、全員が速やかに俺の方を向く。

「状況はどうか」

「ハッキングにより施設地下への扉やエレベータがロックされてるわ。一部の監視カメラから映像が取れて、敵は出荷前の多脚車両を武装して使用してるわね。恐らく盗難品よ」

エラ・ルジャンドルが言う。いつにも増して深刻な表情だ。束も状況を理解したのか黙っている。
近くリリースされる多脚車両は諸外国のデュノアの支部で搬入が終わっているため、そこを襲撃して手に入れたのだろう。

「そうか。よし、その程度の戦力なら問題はない。こんなこともあろうかと――」

「アレを使うおつもりですか？」

アリ・カバニスが確認してくるのに、俺はニヤリと笑って返す。

「いい機会だろう。多脚同士の戦い、テストの汎用性は高い。敵の狙いは恐らく『ＭＬＴ１０１／Ｂ』と新型ＩＳ兵装だ。俺は格納庫に向かって多脚戦車で応戦する。ＩＳを使うまでもない」

「しかし格納庫は地下です」

お前の目は節穴かね。ここには後誰がいるのかよく見たまえよ。

「問題はない。ここには世界最強のハッカーがいるじゃないか」

「……篠ノ乃束」

「レヴァンがどうしてもと言うなら、束さんは手伝ってあげなくもないかな」

俺は束の変化に嬉しくなり、ついつい頭を撫でてやりたくなる衝動を抑えて言う。

「頼むよ、束」

「仕方ないね」

カタカタとパソコンのキーを叩き、空中ディスプレイが目まぐるしく変わっていく。俺は頼もしく思えて、アリに数人の技術者を選ばせて格納庫へ向かった。後は束とエラが何とかするだろう。

◇◇◇

格納庫に最短経路で着く。まだ敵は来ていないらしい。手にはアリに渡された護身拳銃。俺は新型多脚戦車『ＭＬＴ１０１／Ｂ』に乗り込んで叫ぶ。

「アリ！」

「準備できてます！」

「よし！　『ディソーダー』、発進！」

俺の掛け声と共にハッチが開き、格納庫の奥から俺の乗る多脚戦車より大分小さい四脚の機体が姿を現す。その数六。

『自律攻性多脚戦車ディソーダー』。タランテラにＡＩ管制システムを搭載した『ＭＬＴ１０１／Ｂ』を司令塔にＡＩ制御によって動く自律兵器。ＩＳに苦汁の敗北を喫した真の多脚愛者たちが作り上げた、一人プレイ仕様の多脚部隊だ。

「刺激的にやろうぜ！」

緩い勾配を七機の多脚戦車が駆け上がっていく。地上に出ると各機を散開させ、索敵に向かわせる。俺も出力を上げて動きだした。

◇◇◇

強固な攻性防壁を突破して施設の中枢コンピューターに潜り込む。今までで破った中でもかなり頑丈なセキュリティだった。

「でも、束さんにかかればこの通りなんだよね」

「さすがね。世界一二ヵ国の軍事システムを同時にハッキングした腕があれば内のセキュリティなんて障子（しょうじ）みたいなものなのかしら」

金髪の女が話しかけてくる。名前は知らないけど、さっきレヴァンと話していた人だ。

「……あちゃー。向こうも多脚持ってるね」

「えっ、それってマズいじゃない！」

「さっきから君は何なのかな？　横からじろじろ見てきて鬱陶しい、あっち行きなよ」

いつもの調子で金髪を拒絶する。金髪は少し距離をおいたものの、ニヤニヤしながら言った。

「世界最強の天才っていうからどんな娘かと思ってたけど、ボスか

ら聞いてた通りねっ。可愛い可愛いツンデレちゃん！」

「……何こいつキモいっ」

何か急に身体をくねらせて近付いてくる。来るな！

「ねえ、お嬢ちゃん」

「……」

「ボスのどこらへんがよかったの？」

壁際まで追い詰められてにじり寄ってくる。意味不明なことを言うのにクエスチョンマークで返せば、こいつはとんでもないことを言った。

「だぁかぁら、ボスのどこらへんに惚れちゃったのかって聞いてんのよ。束のお嬢ちゃん」

「はぁ！？　意味不明だよ！」

何なのかなこの金髪は！？　束さんを混乱させるなんて尋常じゃない。人間じゃない。

私はとりあえず多脚戦車のことをレヴァンにメールで伝えると金髪から逃げるために私は部屋を抜け出した。

「あら、行っちゃった……」

去り際に何か聞こえた気がしたけど無視無視。

あの変態女の言ったことが頭をよぎるけど、何も考えずに外に出

た。

「この束さんが赤髪を好き？　ないないそれはないよナンセンスだよ」

確かに一緒にいると落ち着くし、それなりに役立ってあげようとは思うけど、それはあくまで一緒にいて不快じゃないだけだし、あいつが生徒会長だからだ。うん。

「きっとそうだね！――うわっ！」

「動くな。そうすれば命までは捕りはしない」

背後から誰かが掴み掛かってきて押し倒される。

ありゃ、束さんが不覚をとるなんて……。みんなみんなレヴァンのせいだ！

「来いっ」

私は首に拳銃を向けられながら引っ張られる。

怖いかもしれない。ＩＳがあればよかったんだろうけど、生憎手元にはパソコンだけ。どうしようか……。

「……ムシャクシャする」

レヴァンのせいだ。あいつがいなければこうはならなかっただろう。確かに不用意に外に出たのは私だけど、大元を辿ればレヴァンが悪い。絶対そう。

だから早く助けに来てよ……。

◇◇◇

「ようやく終わり、と」

途中で現れた多脚戦車にディソーダーを二機破壊されたが、その隙に真横から一二〇ミリ弾を叩き込んで沈黙させた。武装した多脚車両もすべて破壊。一二・七ミリ弾には耐えられなかったようだ。

引き続き警戒しながら――

『ボスっ！』

「エラか。どうした？」

俺の思考を遮ってエラが通信を入れてきた。

『篠ノ乃束が人質に！』

「何だって！？　クソっ今行く！」

何だってこんなときに……！　何やってんだよ篠ノ乃束、世界最高の頭脳があるんじゃなかったのかよ！

どうする。敵の狙いは恐らくこの多脚戦車とＩＳ兵装だ。

束と交換して後から『ラファール・カスタム』でぶっ潰すか。いや、それだと束の無事が保証されない。ＩＳを捨てて俺と束を交換させるか。駄目だ。二人とも殺されるだろう。なら――

「人質を取る相手にとって一番困るのは……これか」

俺は手の内の護身拳銃を握り締めて戦車を進ませた。

「戦車から降りろ！」

「レヴァン……しくじったかな」

そこでは防弾ベストと多脚車両のヘッドギアを着けた男が、束の首に拳銃を突き付けていた。俺は奥歯を噛み締める。全部俺のせいだ。

だが奪わせはしない。

俺はディソーダーの一機に建物に突っ込むよう指示する。男のすぐ後ろでディソーダーは壁に体当たりし、大きな音と共に大破した。

俺はタイミングを合わせてハッチから上半身を出す。瞬時に狙いを定め発砲した。

――束に向けて。

◇◇◇

ベッドで眠っていた束が目を覚ます。起き上がるも状況が理解できないのか寝惚けているのか、その顔を少し困惑気味だ。

「あれ？　束さんはどうしちゃったんだっけ……？」

「起きたか、束」

「レヴァン……？　そうだよ、私人質にされてレヴァンが来て、そ

れから……ちょっ、何！？」

俺は何だか感極まって、気付けば束を腕に収めていた。束はとたんに慌てだす。

「え、何、何なのかな！？」

「よかった……よかったよ」

「あ……うん。ありがとね……」

「生徒会長として、生徒を守るのは当然の行為だ」

俺は束を解放して言う。束は「似合ってないよ」と言いながらその顔は少し赤い。

「……結局どうなった訳？」

「人質を取る相手にとって一番困るのは、人質が自分で立てなくなることだ。だからその……束を麻酔弾で眠らせて、それからあの男の頭を吹き飛ばした」

「あ、それで束さんは寝てたのね。いいよ、助けてくれたんだし、感謝してる」

俺はそれを聞いて少し安心する。するととたんに眠くなってきて、目蓋を重く感じた。

「ね、眠たいなら一緒に寝ようっ。今日の束さんはちょっぴり傷心だからね……」

「なっ……ま、まあ今日ぐらいは、いいか……いいのか」

「うんっ、いいから！　まだ寝足りないんだからさっさと寝るよ！」

「……分かったよ」

レヴァン・デュノア、一八歳にして女の子と同衾……もとい添い寝であります。でも相手が束だと素直に喜べないのはなぜだろうか。スタイルは千冬よりいいんだけど雰囲気がどうもそういう感じじゃないというか……。

まあいい、考えるのはよそう。変に意識すると眠いのに眠れなくなる。それは地獄だ、二重の意味で生殺しというものだ。

でも安心するのは事実だからいいかな。

「おやすみ」

「おお、おやすみ」

俺は久しぶりに最高の眠りを味わうことができた。

◇◇◇

謎の部隊の襲撃から二日間。俺は束とフランス中をデートし、休暇を満喫した。その間やたらとくっ付いてきたけど、俺もそれなりに受け入れられたってことかな。

そして束が日本に帰る時間が来た。

「楽しかったよ。珍しい経験もできたしね」
「あはは……まあフランスのことを知ってもらえて嬉しいよ」
俺は無難に返す。珍しい経験とは言わずもがな、人質になったことだろう。
「たまには誰かといるのもいいものだね」
「それが分かってくれたなら何よりだ」
本当、最初会ったときから変わったよな。少しでも人の温もりが分かれば、こいつももっと豊かに生きれるだろう。
「悪いな、帰り付き合えなくて」
「いいよ、よくしてもらったしね。……そうだ、これあげるよ」
「何だ？」
束はポケットからデータチップのようなものを取り出すと、俺の手にそれを握らせた。
「帰ったら見てみて。それと……」
チュッ
頬に温かい体温を感じる。そこだけやけに熱くなる。こいつ今何した……？

「お、欧米ではこうして挨拶するんだよね？」

あ、挨拶か。挨拶ですか……。そうだよ頬にキスするくらい普通のことダヨ。

ちくせう、可愛いじゃんかさぁ。

俺も束の頬に唇を落とす。束は自分から言ったくせに真っ赤になっていて、思わず笑ってしまう。

「笑わないでよ！　もう……また学園でね、れっくん」

「ククク……ああ、新学期にまた会おう……って、れっくん？」

俺は呼び止めようとしたが、束は駆け足で行ってしまってもう声も届かないところにいた。

俺は追及を諦めて、見送り終えると踵を返してキサラギに向かった。

◇◇◇

キサラギ本拠施設トライトン。俺は束からもらったデータチップから情報を落としていた。

「これは……すごいな。エラ、急ぎ唐沢博士に連絡を。『データ入手。己がロマンを実現せよ』」

「分かったわ。『データ入手。己がロマンを実現せよ』ね」

キサラギのＢＴ兵器信者たち、『チーム・ミラージュ』が動きだ

した。

設定

○主人公
レヴァン・デュノア

○プロフィール
原作開始時２４歳
身長１７７ｃｍ　体重６８ｋｇ
誕生日四月九日
血液型Ｂ型

○概要
　更生者。デュノア社社長、ライアン・デュノアの息子にして一〇歳で大学院を卒業した天才。一四歳で技術者集団キサラギを組織し、一六歳で代表となる。
　一五歳の頃ＩＳを起動させたがその事実は秘匿され、彼が一八歳のときに発表、ＩＳ学園にフランス代表候補生として編入する。
　性格は明るく気さくだが、敵愾心が強く自己顕示欲が旺盛でややお節介。キサラギメンバーの例に漏れず変態の一面を持つ。
　パーソナルカラーは赤と白の幾何学迷彩を多様する。エンブレムは赤い鷹、というかバーテックス。あれは鴉（からす）ですが、似たようなものです（笑）

○ＩＳ年表
　原作の文中に散らばるカオスの欠片（笑）を再構成し、この二次作品に都合のいいように解釈するとこんな感じになります。

◇原作一〇年前（主人公一四歳）
・多脚戦車発表
・ＩＳ発表、一ヶ月後白騎士事件
・篠ノ乃束によってＩＳコアが世界に分配され始める
・各国がＩＳへの対応を決め始める

◇原作九年前（主人公一五歳）
・アラスカ条約締結
・ＩＳ学園設立
・主人公ＩＳを起動、フランスはこれを隠蔽

◇原作八年前（主人公一六歳）
・ＩＳ学園開校
・織斑千冬、篠ノ乃束が第一期生としてＩＳ学園に入学

◇原作七年前（主人公一七歳）
・山田真耶がＩＳ学園に入学

◇原作六年前（主人公一八歳）
・主人公がＩＳ学園に編入
・主人公と生徒会三人のラブコメ←今ココ
・生徒会長の強権が伝統となる
・第一回モンド・グロッソ
・主人公、千冬、束がＩＳ学園を卒業、篠ノ乃家は引っ越し

◇原作五年前（主人公一九歳）
・主人公と千冬が国家代表ＩＳ操者になる
・ナターシャがＩＳ学園に入学
・真耶がＩＳ学園を卒業

◇原作四年前（主人公二〇歳）

◇原作三年前（主人公二一歳）

・束が失踪

・第二回モンド・グロッソ、一夏誘拐される

・ナターシャがＩＳ学園を卒業

◇原作二年前（主人公二二歳）

・千冬がドイツで教官になる

・シャルロットの母親が死亡、シャルロットはデュノアに引き取られる

・千冬がＩＳを引退

◇原作一年前（主人公二三歳）

・千冬がＩＳ学園で教師になる

◇原作開始（主人公二四歳）

・一夏が二人目の男性ＩＳ操者として発表される

・一夏、原作ヒロインがＩＳ学園に入学

ｓｅｃ．１３／新学期と弾丸レース（前書き）

キャノンボール・ファストの設定を少し変えました。原作のスタジアムはまだ施工中という設定です。
それにしても、たかだか二万人しか収容できないスタジアムで時速五〇〇キロメートル以上のレースなんてできますかね？

ｓｅｃ．１３／新学期と弾丸レース

「生徒会役員の諸君、健勝なようで何より」

生徒会室に集まった三人を見てレヴァン会長は言った。私も会長が元気なようで安心しました。

でも――

「何でっ、さっきから、束先輩はレヴァン会長にひっついてるんですかぁ！　フ、フランスで何が一体あったんですかぁ！」

そう、夏休み前までは無愛想極まりなかった彼女が、新学期になっていきなりレヴァン会長にべったりなのだ。これはフランスで何かあったに違いない。

私は束先輩を引き剥がしたいけど、彼女の切れ目が鋭くに睨み付けてくるので動けないでいる。

「名前で呼んでいいなんて束さんは一言も言ってないんだけどね。地味眼鏡はあっち行きなよ」

「じ、地味……。ででもっ、胸はあなたより大きいです！」

そう、私にはこれがある！　これがある限り地味とは言わせません！

「胸が女のすべてじゃないし！　スタイルは私の方がいいし！」

「そ、そんなの負け惜しみで――」

バシンッ！

「うぅ、痛い……」

千冬先輩がクリップボードで叩いてきた。結構いい音が鳴った。

あ、そう言えば千冬先輩が生徒会で一番胸が小さいんだった。それでもＤくらいありそうなものだけど。でも私はＦだもんね、えへんっ。

――バシンッ！

「……もう一発いっておくか、山田君？」

「叩いてから言わないでくだ――」

「そうか、もう一発か」

「け、結構です……！」

怖すぎます千冬先輩。ていうか何で私の考えてること分かったんですか！

うう、脳が揺れる。

「フフン、眼鏡はそこでそのままうずくまって――」

バシンッ！

「痛いよちーちゃん……」

「お前もいつまでもつまらない言い争いはするなよ東。話が進まんだろう」

東先輩もぶたれたらしい。何か千冬先輩も叩きキャラが板に付いてきた。

「あー、いいか？」

空気だったレヴァン会長が口を開く。あ、私はちゃんと見てましたよ！

「月末にキャノンボール・ファストが控えている訳だが――」

何だかんだで、今日も生徒会の会議が始まった。

◇◇◇

会場が熱気に包まれる。合衆国某所、俺は国際ＩＳレース、キャノンボール・ファストの専用サーキットのピットにいた。

スタート地点を挟むように観客席があり、その上を高い屋根が覆っている。空中ディスプレイがあちこちに配置され、選手とそのＩＳが映し出されていた。

このキャノンボール・ファストは毎年催されるＩＳを用いたレースだ。今年で二年目になるんだったか。全長約一〇キロメートルのコースを平均時速六〇〇キロメートルで駆け抜ける、地上サーキットレースでは世界最速のレースである。

その種目は二種類に別れている。訓練機を使い公式規格の存在する『フォーミュラ・レース』と、専用機持ち用の何でもありな『マ

ルチ・フォーム・レース』だ。俺と千冬は後者に参加していて、これから決勝戦というところ。
現在世界に専用機持ちは四一人。妨害ＯＫな手間、さすがに全員一緒にするには多いので、四つのグループに別れて飛び上位八人が決勝に進むことになる。ちなみに予選でのラップタイムは千冬の『暮桜』がダントツの一位で、二位が俺だ。
夏休みにフランスに帰っていたのは今大会のために新兵器を試験するためだ。『ラファール・カスタム』は新世代ＩＳ開発のデータ取りのために、様々な兵装でアセンブリすることができる。
現在装備しているのは高速戦闘用パッケージ『フリート』だ。肩の可動盾をスラスターとし、背部に大型ブースターを取り付けている。中央に大きな基部があり、その両サイドに二機のスラスターが備え付けてある。十二枚のフィンを円形に配した推力偏向ノズルを採用し、加速力と運動性能を両立している。戦闘機のような外観が特徴的だ。
まあ予選では『非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）』を採用している『暮桜』に負けたが、この程度で勝てたらむしろ拍子抜けというものだ。
『フリート』はまだ本来の性能を発揮していない。二機のスラスターは所詮『補助（バーニア）』だからな。
競馬のものを大型化したようなピットでレースの開始を待つ。俺を含め選手各人はウズウズしながら構えている。千冬も同じはずだ。
俺は夏休み前に千冬とある賭けをした。このキャノンボール・ファストで負けた方が勝った方の言うことを一つ聞くというものだ。俺は千冬にメイドコスで奉仕してもらうつもりである。
自動車のレースのようにシグナルが開始を知らせる。赤色のランプが一つずつ増えていく。俺は予選で出し惜しみしていた奥の手を早速起動させた。
『フリート』の基部が大きく口を開け、エネルギーコンプレッサーが唸りを上げる。

「――オーケィ、レッツパァリィィィィィイァ！」

鳴り響いたブザーを合図に、『オーバード・ブースター』の金切り声を上げながら俺はすっ飛んでいった。

開幕早々他の選手に大きく差を付けて、俺はカーブに入る。いきなりの連続カーブに『オーバード・ブースト』を切り、機体を切り返す。両肩の可動盾で体勢を整え、推力偏向ノズルをうねうねと動かしながら鋭いヨーイングでコーナーを抜ける。

いくつかのコーナーを曲がったところで千冬が追い付いてきた。曲がるたびに『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を行う離れ業で詰めてきたらしい。

「何という千冬ミサイル……」

そうこう言ううちに雪片で切り掛かってきた。俺はロールして紙一重で躱す。いくら推力偏向ノズルといっても、『非固定浮遊部位』を持つ『暮桜』ほどの運動性能はないのだ。

「そんなものを隠し持っていたとはな！」

「今回は勝たせてもらうぞ！」

「勝つのは私だ！」

雪片ヤバス。盾がちょっと欠けた。

俺はバレルロールで千冬を追い抜かせると、両手の機関散弾砲と無反動機関砲を斉射する。面白いように命中して焦る千冬に俺はほくそ笑む。体勢を崩した『暮桜』を追い抜いてトンネルに入った。

他のレースと違ってこういった絡め手が打てるのがキャノンボール・ファストの面白さだ。

「ハッハァー、修行が足りんのう！」

「レェヴァンッ！」

何か怒らせたっぽい。

視線もくれずに後ろに向かって牽制射撃する。避ける千冬とさらに距離が空く。通常の空中戦と違って直進しなければならないため、弾幕はいっそう回避しづらくなるのだ。

ふと見れば、腹いせとばかりに千冬が追い付いてきた選手を速攻で屠（ほふ）っていた。

「あいつちょっと張り切りすぎだろ……」

もしかしたら俺の命令に直感的に尊厳の危機を感じたのかもしれない。いいじゃないか、メイド服きっと似合うぞ。

『オーバード・ブースト』で一気に振り切ろうとするが、向こうも『瞬時加速』で追随してくる。

急カーブに差し掛かり、『オーバード・ブースト』を解除すると旋回性能で勝る『暮桜』が『ラファール・カスタム』と並び、雪片を振るってくる。何とか盾で捌く俺に千冬が言う。

「私にああも食らわせるとは、期待以上だよレヴァン！」

ん？　怒ってるというより何か楽しそうですね、千冬さん。上気した頬がむしろ怖いです。

開幕早々シールドエネルギーの三割持っていったことで変なスイッチが入ったらしい。心なしか肌がつやつやしているように見える。

「お望みとあらば、マッハで蜂の巣にしてやんよ！」

マシ書（マシンガンとショットガンのダブルトリガー）の恐ろしさ見せてくれる。
急カーブを抜け再度『オーバード・ブースト』で加速する。巡行型の『瞬時加速』を行う専用ブースターが機体を押し上げ、俺を亜音速へと導く。
みるみるうちにカーブで距離を稼いだ『暮桜』に迫り、機関散弾砲の射程に入ると俺は両手の指でトリガーを引き絞った。
火薬と薬莢がスネアーの利いたビートを刻む。
千冬も不意打ちでもない攻撃に当たることもなく、超人的な回避機動で射線を逸らす。

「グレマシならどうよ」

機関散弾砲の給弾ルートを変更し、榴弾を薬室に送り込む。それだけで左の武器は速射投擲銃に変わる。
毎秒五発という速度でグレネードが発射されていく。これには千冬も答えたのか、速度が落ち俺と並んだ。
そのまま二人で一週目をクリアした。

――ラップタイム、４８秒２７

.

ｓｅｃ．１３／新学期と弾丸レース（後書き）

都合により分けます。

ｓｅｃ．１４／ジコとコイ

レースも終盤。お互い一歩も譲ることなく、レヴァンと私は抜きつ抜かれつの戦いを繰り広げていた。
最初こそ不覚を取ったが、今はまったく互角と言っていい。元々技術的には私が勝っていたものの、レヴァンも機体の特性を最大限引き出して食い付いてくる。
最終ラップに入る。直線を『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で駆け抜ける。レヴァンも五〇メートルほど遅れて付いてきていた。
平均時速六〇〇キロメートルのキャノンボール・ファストにおいて、五〇メートルは極近距離だ。

「どうしたレヴァン。いつまで女の尻を追っているつもりだ？」

激励も込めて挑発する。
私は本気でやりたい。だからお前も本気を出せ。真の実力を私に見せてみろ。

「ハッ、舐めんなよ雌牛ちゃん（ヒーファー）！」

最初の連続カーブに入ると、レヴァンは追加スラスターを起動させる。この決勝で初めて使った『瞬時加速』専用のスラスターだ。
カーブを曲がるごとに使用して失った速度を回復している。一週目で私がやった業だ。

「あいつめ、私をよく見ているな。スライド角度もばっちりじゃないか」

レヴァンも私以外は眼中にないらしい。私ももはや後続の選手など気にならない。二人だけのデッドヒートだった。
瞬く間に追い付いてくる『ラファール・カスタム』の盾には、雪片で付けた生々しい傷痕が目立つ。
距離が詰まることで切り替わる榴弾と散弾の応酬を掻い潜りながら、トンネルへと入る。
プライベート・チャネルでレヴァンが話しかけてきた。その間も銃撃と斬撃は続いている。

「賭け、忘れてねーだろうな！」

「フン、今さらどうでもいいな」

私は今のこの戦いを楽しみたい。そう返すとレヴァンは「じゃあもっと楽しませてやる」と前置きして、叫んだ。

「俺が勝ったら今年の学園祭、メイド喫茶でメイドをしてもらう！」

「な、何だと！？」

こいつ、この張り切りようはその邪な欲望のせいか！　失望したぞレヴァン！
この私にメイド服を着せようなどと……けしからん、けしからんぞ！

「お先！」

「貴様ぁっ、私が天誅を下してくれる！」

弾幕と追加スラスターで一気に振り切ろうとするレヴァンを『瞬

時加速』で追う。大丈夫、この『暮桜』の運動性能なら次の急カーブで追い抜けるはずだ。
この戦いだけは負ける訳にはいかない。私の尊厳がかかっている。私はどんな醜い勝利も受け入れる覚悟を決めた。

◇◇◇

メイド発言から千冬の表情は一変、戦士の顔から乙女の顔になった。しかし必死さは倍増した。

「今から悔しげな顔が目に浮かぶ――」

「もう勝ったつもりか」

さすが『暮桜』、カーブに強い。だが、俺だって今度こそ千冬を屈伏させてやりたい。
近距離にもかかわらず、俺はグレネードをぶっ放した。

「くっ……！」

直撃は避けたみたいだが、グレネードは爆風で攻撃するもんだ。
案の定『暮桜』は体勢を崩し、『ラファール・カスタム』と並んだ。

「負けるかよ、こちとらお前のメイド姿のために死ぬ気でやってんだ！」

「変態がっ！」

「男のロマンだ！」

雪片で右の無反動機関砲が破壊される。相変わらずすさまじい切れ味。俺は使いものにならなくなったそれを捨てて、散弾を連射する。

カーブを抜けて直線に入ると、俺は『オーバード・ブースト』を起動させようとするが――

ギンッ！

――雪片の刀身が傷だらけの可動盾に突き立った。雪片ェ……。

般若のような形相で千冬が言う。

「私が勝つ……勝って雪片で貴様のナニを斬り飛ばしてやる……！」

ちょぉぉぉおっ！

ヤバイ、これは本気の目だ……！　そんなことされたらＩＳ学園が本当に女の子だけの学園になっちまう！

それはならん、それだけはならん……！　だがこのまま取り付かれていては、一週目のトンネルで切り刻まれたあの娘のようにズタボロになることは必至。

俺は最後の最後、取って置きの取って置きに一縷（いちる）の望みを託した。

「クソッ、キャスト・オフ！」

盾が、武器が、補助スラスターが、解き放たれる。ＩＳとして必要最低限のパーツと『オーバード・ブースター』を残して、他のすべてのパーツがパージされた。

浮いたエネルギーをすべて『オーバード・ブースト』に回し、音速を超え、俺は砲弾のようにゴールへと直進していった。

◇◇◇

白黒ツートーンのゴールラインを越え、ブザーが鳴る。一着を知らせるランキングボードが空中ディスプレイに表示される。

『オーバード・ブースト』を持続できなくなった『ラファール・カスタム』が姿勢を崩し、俺は地面に叩きつけられた。絶対防御があるため怪我の心配は無用だが、ぐるぐると転げ回るのは御免こうむるので何とか体勢を立て直す。が――

「ふぅ……どあぁっ！」

――そこに『暮桜』が突っ込んできて、俺は吹っ飛ばされた。

二人してもつれ合いながら緩衝壁に叩きつけられる。シールドバリアーが壁に亀裂を作り、衝撃でクレーターができた。

「うん、ふむぅ……」

俺の下から、千冬のそこはかとなくエロい声が聞こえてくる。

疲労と緊張の解れから力が入らないが、唇に柔らかい感触がある。

悪い予感と共に恐る恐る目を開けてみる。

（千冬……近い、え……？）

あまりに近い位置で千冬と目が合った。その目は驚愕とその他諸々で大きく見開かれていた。観衆の歓声の中、やけに互いの息遣いが鮮明に聞こえた。

混乱を落ち着かせるのに五秒、自分たちの体勢を理解するのにま

た五秒。たっぷり一〇秒たってから、俺は彼女の唇から自分のそれを離した。

「えっと……あの、これはその……事故――」

「どさくさに紛れて女の唇を奪うなど……そればかりかまだ醜態を晒すつもりか……」

「いやっ、こ、これは所謂事故ってやつで――」

「お前は欧米出身だからな、多少のスキンシップは容認していた……だが」

「聞けよ千冬っ。確かに不用意に立ち上がった俺も悪かったが、その……キスは事故で……」

「うるさいっ！」

俺は誤解を解こうと必死に弁明するが、千冬は聞く耳を持たない。いっそぶっ飛ばしてくれたら楽なのに、千冬はなぜか赤面しながら泣きそうな声色で責めてくる。

千冬は俺を振り切って立ち上がると、ＰＩＣを起動して浮き上がる。

「お前には失望した……学園祭の企みもそうだが、何よりこのことに……！」

「千冬っ！」

俺はパーツの足りない『ラファール・カスタム』で『暮桜』の腕

を掴む。
何だってんだ。あんなの事故なんだからノーカウントってなもんだろうがよ。
俺は放せと振り切ろうとする千冬を押さえつけ、むっとしながら言った。
「千冬、お前ちょっとおかしいぞ。何をそんな怒ってるんだ」
すると千冬は顔を上げ、涙目で睨み付けてくる。
冗談の含有量ゼロパーセントの強い口調で言ってきた。
「衝突したのはいい、キスのことも別に怒ってはいない」
何言ってるんだこいつは。そうじゃなきゃ何に怒ってるって言うんだ。
俺はますます分からなくなって、眉をしかめた。そんな俺に千冬が怒鳴る。
「私が怒っているのは、私の初めてを事故だなどと言ったことだ！」
「……は？」
予想外の答えに俺は一瞬頭が空っぽになる。
「私のファースト・キスを奪っておいて、その態度は何だ！　事故？　ふざけるなよ、変態！　女を馬鹿にしているのか！？」
「……」
あー、どうやらこいつはファースト・キスが誤爆ったのが受け入

れられず、それで癇癪を起こしていたらしい。何だよお前、理不尽だろ……可愛いけどさ。
まあ、千冬は俺が思っているよりずっと乙女だったということか。
自分の先入観と浅慮に恥じ入る。まあ普通は――普通にあり得る事態ではないが――誰しも俺と同じことを言っただろうが、俺は変態で、紳士だ。乙女ちーちゃんにはこれくらいの譲歩はすべきだろう。

「……悪かったよ。組み敷いた体勢で見る千冬があまりに魅力的で、自分の欲望を制御しきれなかった。許してくれ」

「さ、最初からそう言えばいいんだ……この変態め。私も失望したなどと言って悪かったな。少々気が立っていた……」

「いいさ、お互い様だ」

しょぼんとする千冬。思い出すように唇に指を当ててほのかに頬を染めている。
乙女モードの織斑千冬……可愛すぐる。
千冬の肩に手を置いて、俺はクーデレの破壊力を噛み締めながら言う。

「学園祭のメイドコス、よろしくな」

「やはり失望した！」

――ズガンッ！

雪片のフルスイングからの強力な峰打ちが俺の側頭部を正確に捕らえ、絶対防御の上から俺の意識を刈り取った。

.

ｓｅｃ．１４／ジコとコイ（後書き）

千冬デレ。スーパー千冬タイムは近い。

ｓｅｃ．１５／ちーちゃんご乱心（前書き）

スーパー千冬タイム！

２０１１／２／２１　００：００でアンケートは締め切ります。

ｓｅｃ．１５／ちーちゃんご乱心

「何だこれは……」

生徒会室のスライドドアが圧縮空気の音と共に開いた先には、カオスが待ち受けていた。

「ちーちゃん！　どうかな、これ。似合ってる？」

親友がティーセットを両手に話し掛けてくる。それはいい。

「あ、千冬先輩。お、お帰りなさいませ……」

後輩が椅子に座る生徒会長の赤髪を三つ編みに結っている。それも、思うところがない訳ではないがまあいい。

だが――

「お前たち、何て格好をしてるんだ！？」

「何って、見ての通りメイドだよ」

そこにはねっとりとしたにやけ顔を張り付け紅茶をすする生徒会長と、二人の献身的なメイドがいた。

何を言っているんだとばかりに返す束に詰め寄り、私は言う。

「な、何でお前がメイド服など……」

「れっくんが可愛いって言うからさぁ、ね？」

『ね？』じゃない。山田君ならまだ分かる。彼女がレヴァンに憧れだか好意だかを抱いているのは知っている。
だがお前は何だ？　東の変わりようは私が一番実感できる。夏期休暇に何かがあったのは間違いないが、こいつは答えようとしない。

「二人ともすごく似合ってるだろ？」

「何のつもりだレヴァン」

目線だけ向けてくる諸悪の根源らしき男に睨み付ける。しかしまるで動じた風もなく、レヴァンは言う。

「もうすぐ学園祭だろう？　だから二人にはリハーサルとして着てもらったんだよ。着方を知ってる人がいた方が当日困らないしな」

「なっ……」

そうだ、こいつはキャノンボール・ファストでの賭けで勝ち取った命令権で、私にメイド服を着せる心算なのだ。
確かにここのところ特訓に来なかった。“あんなこと”をされた手前私から誘うのははばかられたため放っていたが、計画は着々と進んでいたらしい。
ふと唇に手を当ててあのときのキスを思い出す。とたんに顔が熱くなってくるのを感じ手を離すが、レヴァンがニヤニヤしているのに気付いて私は怒鳴った。

「何がおかしい！」

「いんやぁ、今日はやけに可愛いと思ってなぁ。それにしても千冬

が百面相するなんて、何かあったのか？」

こいつ、全部分かったうえで言っているな、小癪な奴め……！

私はそっぽを向いて何でもお見通しだと言わんばかりのレヴァンを視界から追い出すと、頭を冷やすために束から紅茶を引ったくった。

マナーなどかなぐり捨てて一気に飲み干す。細かいことは分からないが旨いのは確かだった。

「束には接客じゃなくて、後方で俺と料理とかを担当してもらうから紅茶の容れ方を教えてみたんだが、なかなかイケるだろ？」

「篠ノ乃家の女は料理上手なんだよ」

「私は何もしないからな！」

釘を刺すつもりで言ったがレヴァンはまるで聞き入れない。

「生徒会会長として不参加は認められないな。第一、今回の主役は千冬、お前なんだから」

「……ど、どういう意味だ」

真耶が『終わりましたよ』と三つ編みの完成を告げると、レヴァンは礼を言って立ち上がる。真耶の頭を何回か撫でると、自分もと近付いてきた束を撫でる。

たっぷり焦らされた私は目付きを鋭くして再度レヴァンを睨み付ける。するとようやく口を開いた。

「千冬は今回のメイド喫茶の花形だ。特別な衣装を用意している」

「ＩＳスーツからサイズを逆算したからぴったりのはずだよ」
「私が着たかったんですけど……」
特別？　つまりこの赤髪は私に二人よりも“すごい”衣装を着せようと言うのか？
こいつの性格からして“すごい”が“過激”に翻訳されることは必至だ。つまりはだ、ただでさえフリフリやら何やらで派手な衣装がさらに派手になるということ……。
無理だ。そんなもの着せられたら織斑千冬は織斑千冬ではいられなくなる。恥ずかしすぎて死ねる。
そう思案しているうちに、レヴァンはどこからともなく『特別な衣装』らしきものを取り出す。
「絶対領域と胸元、二の腕を意識した職人至高の逸品だ。一着三〇万、千冬のためだけに用意したんだぞ」
「ちょっと着てみてよちーちゃん。絶対似合うから！」
「可愛い千冬先輩も、見てみたいです……」
三人が近付いてくる。衣装は、可愛い。可愛すぎて死ぬ。
迫られるごとに私は後ずさる。戦士としての誇りと乙女としての誇りを天秤にかける。
「さあ、いざ！」
「……う、うわぁぁぁあ！」
私は乙女の誇りを取り、脱兎のごとく逃げ出した。

◇◇◇

ひたひた……

ひたひた……

絶望がにじり寄る。織斑千冬の尊厳を根こそぎ奪い去ろうと魔の手が迫る。

「や、やめろっ……来るな！」

一歩また一歩とその手に『羽衣』を持って、近付いてきた。右足が手錠のようなもので繋がれていて逃げることもできない。ＩＳもなぜかうんともすんとも言わなかった。

朝起きたらすでに生徒会室（ここ）にいて、傍には朝食と紅茶が用意してあった。しばらくすると見慣れた三人が見たことのない表情で部屋に入ってきて、喋る間もなくこの状況である。

「今さら抵抗しても無駄だからねん、ちーちゃん」

親友が見たこともないほど口端を上げる。手にはかの『羽衣』が揺れている。自身も羽衣を纏っているが、『羽衣』とは及びもつかないマシなものだ。

「千冬先輩……レヴァン会長のお達しですから、その……諦めてくだいね」

上司の命令を免罪符に手を伸ばしてくる後輩から奥にいる諸悪の根源に目を移せば、待ってましたと言わんばかりに嗜虐的な笑みと共に言ってきた。

「千冬……お前、今最高に可愛いぞククッ」

殺意。それと羞恥。

この変態がそっち方面の才能も有していることを認識して吐き気がする。こんな変態にほんの僅かでも好意を向けていた自分が疎ましい。

何より許せないのは、この状況が自分の敗北によるものだということ。神聖な勝負を賭けによって落としめたこいつにも腹が立つが、だとすればそれを安請け合いしあまつさえ負けた自分はどうなのかと。

考えてみればこの変態が期待しているのは私が羞恥に悶えることではないか、しかしだからといって素直に従うことを織斑千冬のプライドが許すのか。

まとまらない考えを巡らせる間も魔の手は確実に迫っている。

「もう、どうにでもしろっ！」

「元よりそのつもりだ。着替えが終わるまで俺は出ているぞ。期待してるよ、千冬」

「フンッ……惚れるなよ」

「威勢がいいな。だがそれはお前次第だ」

私の精一杯の強がりも見透かされ、レヴァンは部屋を出ていった。

束と山田が私の服に手をかけるのに、私は言い放った。

「どこからでもかかって来い。私は逃げも隠れもしないっ……」

織斑千冬はまんまと乗せられてしまった。

◇◇◇

「まったく、期待以上だ……」

普段はクールで制服をまるで軍服のように――事実ズボンだし――着こなす千冬だが、今は初めて見るスカート姿だ。

ミニスカートとガーターベルトで支えられた絶対領域が眩しい。大きく開いた胸元はメイドの慎ましさなど微塵も残してはいなかった。

胸に手を当てスカートの裾を引っ張り内股でもじもじする人類最強は、あまりにも愛らしすぎた。

羞恥からだろう、俺が頬を撫でても赤面するだけで抵抗する余裕はないようだ。

「私にこんな格好をさせて楽しむか……変態が」

「でも可愛いぞ」

「ちーちゃん、大丈夫。どこも変なとこないから」

「そういう問題じゃ――」

「あのっ、時間も押してきてるので、早く写真撮っちゃいましょう

！」

「なっ……！」

真耶の言葉に赤面していた千冬の顔が一気に蒼白になる。

真耶は三脚を素早く立てカメラを固定する。俺は千冬の腰に手を回して逃げられないようにした。

「は、放せレヴァン！」

「あー！　ちーちゃんずるいっ私も！」

束が右腕に絡み付いてくる。最近まるで警戒心がないから少し危うく感じるが、好意を向けてくれるのは素直に嬉しい。それに答えられない自分が不甲斐ないのだが。

『その先は言わないで』なんて言われたら答えようがないだろ。俺としても今束のことが好きなのかどうか分からないし。

カメラをセットし終えた真耶が今度は左腕に抱きついてくる。

「会長は今はまだ共有財産じゃないですかっ、抜け駆けはダメですよ、束先輩！」

「むーっ、眼鏡のくせにー！」

「め、眼鏡はチャームポイントなんですっ」

真耶についても同様、保留状態だ。束には相変わらず眼鏡呼ばわりされているがかなり打ち解けてきた。いや、危険視されているだけかもしれないが。

今だってこう、大分いいものが当たってるんだよ。ていうか自分

でチャームポイントとか言うのか、似合ってるけどさ。

「肖像権の侵害だ！」

「そう堅いこと言うなよ。いい思い出になるぞ」

「こういうのは黒歴史と言うんだ！」

肩に顎を乗せると観念したのか千冬はカメラの方を向く。俺は腰に回していた腕の力を少し抜いたところでカメラのシャッターが切られた。

小気味いい音と共に思い出が刻まれた。

「私がコスプレだなんて……スースーするし」

「これからお仕事があるからねー」

追い打ちをかける束にうなだれる千冬。何かもういろいろと諦めているようだ。

◇◇◇

「お、お帰りなさいませお嬢様っ」

千冬は終始赤面しながら応対する。『千冬様ー！』なんて言って抱きつこうとする生徒は俺が制しながら席に通していた。

千冬と俺のクラスである三年一組と二組に協力してもらって催しているメイド喫茶だったが、千冬人気のすさまじさに千冬本人が物

理的に押し潰されそうだったので俺が出張ってきている。束は不満そうにしていたが、少し甘えさせて何とか抜け出してきたのだった。

「うう、やっぱり私には無理だ……」

「これくらいでへこたれるなんて、千冬らしくないぞ」

「私がどれだけの羞恥を我慢しているか分かって――」

「我慢することなんて何もないだろう？　ありのままあればいい。俺がサポートしてんだから無理なことなんてない」

千冬の言をさえぎって言う。内股を擦り合わせながら赤くなる千冬は本当に可愛い。普段見せない表情につい見惚れてしまう。

「何を偉そうに……お前が私にこんな辱めを強要しているのだから、サポートするのは当然だっ」

「辱めって……本当に可愛いんだぞ？　自信持てって」

「う、うるさいっ」

「うわっ！」

千冬は俺を突き飛ばす。俺は体勢を整えようとするが足がもつれて上手くいかない。何とか腹から着地しようと身体を捻るが、後ろにはトレーにドリンクを乗せた真耶がいて――

「きゃあ！」

どんがらがっしゃん。そんな類の音が聞こえたかと思うと、湿った布地とこの上ない柔らかさが俺を包んだ。

「やん……もう、レヴァン会長ったらこんな人前で……。こ、こういうプレイは二人きりのときにと……」

「ご、誤解だ！　て、怪我ないか真耶っ」

ものの見事に真耶の柔らかな双丘に飛び込んだ頭を上げ、グラスが割れていないことを確認して安堵する。

「うう、上も下もびしょびしょです……」

どことなく卑猥な表現をする真耶は、それはもうすごかった。濡れた生地が張り付き胸の凹凸を正確に伝え、スカートがめくれて下着が見えそうになっている。俺は沸き起こってくる情念を理性で押さえつけて平常心を保つ。

このままにはしておけないので俺は真耶を横抱きにして立ち上がる。

「えっあの、私ってばお仕置きされちゃうんですか！？」

「違うっての！　生徒会室に予備があるから、着替えてもらう。一人で行かせる訳にもいかないだろ」

「生着替えですか……？　どうしてもと言うなら私も……キャッ」

もう駄目だこの娘……。

俺は無視して真耶を運んでいく。真耶はロリ巨乳でドジっ娘眼鏡と属性満載だからな、こんなこともあろうかと予備は二着ほど用意

してある。

「誰かここ片付けておいてくれるか？」

返事が聞こえると共に千冬が申し訳なさそうな顔をする。俺は少しでも安心させようと一言告げる。

「千冬、ここでのトラブルの責任は全部俺にある。だからそんな顔すんな、お客様に失礼ってなもんだろ？」

「済まない……」

「可愛いから許す」

俺は満足して、生徒会室に向かった。

◇◇◇

学園祭も終わりが近付き一部で片付けが始まる頃、俺と千冬は生徒会室にいた。

「お前が真耶と出ていってから大変な目にあったぞ。クラスメイトたちも調子に乗り出すから収拾が付かなくなるし……」

「それは悪かったよ。途中でいろいろあってな」

「まったく、私はあのまま脱がされるかと思ったんだぞ……」

な、何があったんだ……？　俺は真耶を送ってから別の仕事が舞い込んできたから仕方なくそれに当たってたんだが、その間千冬には構えなかったからよく知らない。
だが傷付けてしまったのは確かなようだった。
「ごめん、思えば俺も調子に乗ってた。悪ふざけがすぎたよ」
「……本当にな、馬鹿者が」
千冬がしなだれかかってくるのを支えながら、俺は反省していた。今回ばかりはやりすぎた。
いつもに比べて今日の千冬は随分と頼りなく見えた。疲れたんだろう、俺はそのまま千冬の肩を抱く。
「だが、可愛いと言ってくれたことは、別に嫌じゃなかったぞ」
「そう言われると、余計に罪悪感がつのるな。本当に可愛いんだからな……そういえば、着替えないのか？」
何を思ってか、千冬はいまだにメイド服のままだった。初めて聞く甘ったるい声で千冬は答える。
「私が満足するまで可愛いと言い続けたら、脱ぐかもしれないな……」
思わずドキッとする。頬を染め僅かに笑みを浮かべる千冬に、俺は吸い込まれそうな気分だった。
「可愛いよ、すごく可愛い……」

「続けろ」

「……本当に、クーデレ最高です」

「フフフ、元はお前が撒いた種だというのに、お前に慰められてこんな気持ちになっていては……私もとうとう焼きが回ったか」

千冬が顔を近付けてくる。正確には唇を。こいつこんな顔できたのか……。

俺はすっかりその気になってキスしようとするが『がっつくな』と押し留められる。

「目を瞑れ……いいぞ、来い」

よしの合図がでたので唇を近付けていく。何だか調教されている気がしないでもないが、千冬ならいいかと従った。

ゆっくりと縮まる距離が、短いのにとても長く感じられてもどかしい。その距離は一センチずつ、一ミリずつ詰まっていき、やがてゼロに――

ゴツン……

何だ？　やけに硬くてひんやりとした感触がある。キャノンボール・ファストのときはもっとずっと柔らかくて温かかったが……ん？　この気配は、もしや……！

俺はゆっくりと目を開ける。目に飛び込んでくる銀色の刀身に絶望を見た。

「私があんな辱めを受けて惚れるようなドM女に見えたか、ん？」

「ち、千冬……さん？」

そこには『暮桜』を部分展開し雪片を俺の喉に当てている、とてもいい笑顔な織斑千冬がいた。メイド服によく似合っているが、できればその笑顔はメイド喫茶でしてほしかった。

「今すぐ第三アリーナに来い。来なければ後でどうなるか……分かるな？」

そう言いながら柔らかい太ももで、俺のいつの間にか立派になっていたアレを押し潰す千冬さん。来なかったら斬り飛ばすんですね、分かります……。

「し、承知いたしました……！」

「うむ、それでいい。せいぜい可愛がってやる、お前が可愛いと言った回数だけな……」

そして千冬さんは生徒会室を後にする。俺は今、ようやく後悔というものを知った。

◇◇◇

絶対的な蹂躙があった。

俺の奮闘も虚しく、『ラファール・カスタム』は雪片に切り刻まれた。かつての勝利などなかったかのように、本格的に人間を辞め始めた千冬の猛攻に手も足も出なかった。

その様はまるで肉食獣に食い荒らされる草食獣の図だっただろう。

『ラファール・カスタム』の損傷レベルはDに突入し、俺は意識を失ったのだった。

「起きたか、レヴァン」

「ヒッ……！」

目覚めてみればそこには先ほど俺をボロ雑巾にした織斑千冬様。俺は反射的に跳び退こうとするが全身打撲で力が入らない。

「そう警戒するな。今回のことはこれで手打ちにしてやる。私も少し本気を出しすぎた」

「あ、ああ……」

本気って、殺意的な意味でだろ。まあ、俺もそれくらいひどいことをした自覚はあるし、この状況は別に不本意じゃない。やられて当然だろう。

そう返すと千冬は安心したのかため息を一つつき言った。

「そうか、ならこのころはこれで終わりにしよう。済まなかったな」

「俺も悪かったよ」

「うん。そ、それでな、私なりに考えてみたのだが……」

突然顔を逸らして千冬は言う。何かあるのだろうか。

しばらく待っても何も話さないので辺りを見回すと、時計はすでに七時を指していた。よく見てみれば外も暗い。こいつ俺が起きるまで待ってたりしたのか？

「レヴァン……」

「何だ？」

千冬が話し始めたので視線を戻す。

「賭けをしたな、そして私が負けた」

「ああ、そうだが……それはもう終わっただろ」

「いや、ま、まだだ……」

一体何を言いたいのだろうかよく分からないが、千冬の中ではまだ終わってないらしい。

「私は、メイド喫茶の腹いせにお前を叩きのめした」

「改まって言われると堪えるものがあるな……」

俺の言葉には耳を貸さず千冬話しを続ける。暗くてよく見えないが、その顔は恥ずかしげだった。

「メイド喫茶は私に相談がなかったとはいえ生徒会の催しだ、叩きのめしたのはそれに文句を言う行為にすぎない……」

「結論から言うと？」

千冬は一度深呼吸して伝える。

「か、賭けの命令権は清算されていない……」

「えっと……？」

「……メイド服で奉仕してやると言ってるんだ！」

いちいち言わせるな馬鹿者、と続く千冬の言葉に俺の思考が一瞬停止する。

それってつまりあれですかっ、メイドちーちゃんとにゃんにゃんできるんですか！？

「馬鹿者っ、誰がそんなこと言った！？」

「すみません……」

「と、とにかく、今から着替えるからあっち向いてろ……」

「そういうのは俺が寝てる間に――」

「黙れ、お前は音だけでもイケるくちだろう？」

「何だよ、人を変態みたいに」

変態だろと返されてうっとうめく俺。男なんてみんな変態だよ。

そうこうする間に布の擦れる音が聞こえてくる。ていうかお前枕元で着替えてるだろ、保健室なんだからレースとかあるだろっ。それ使えよ！

「終わったぞ……」

「ああ……」

振り返って千冬を見る。うう、可愛い。月明かりに照らされた白磁の肌が、思わず触れたくなる絶妙な照り返しを発している。

「ふ、触れたいのですか、ご主人様……？」

「え！？　あ……」

主従モードに突入した千冬が俺の左手をそっと自身の大きく開いた胸元にあてがう。や、柔らかいです……。

確かノーブラで下にコルセットだったか……胸が強調されすぎだろ……。

「綺麗だ……」

「ありがとうございます……」

思わず口をついて出た言葉に自分でも赤面する。しばらく感触を楽しんでいたが唐突に戻される。

「こ、ここまでです……夕食の用意ができております」

「た、頼む……」

千冬は置いておいたのだろう料理の乗ったトレーを持ってくると、ベッドに腰掛けてスープをスプーンですくう。

「あ、あーん……」

「あーん……うん、おいしいぞ」

「そう言っていただけて嬉しい、です……ご主人様」

千冬が可愛すぎて生きるのが辛い……。メイド服で主従プレイ……けしからんな。

俺たちは終わりのタイミングを掴めずに、結局消灯時間ぎりぎりまでプレイを続けていた。

.

ｓｅｃ．１５／ちーちゃんご乱心（後書き）

ちーちゃん可愛すぐる……。

ｓｅｃ．１６／日だまりと腹黒（前書き）

お待たせしました。

ｓｅｃ．１６／日だまりと腹黒

学園祭から数日して、レヴァンはフランスに一週間ほど帰ることになった。理由は言わずもがな、私があいつのＩＳを破壊したためだ。

代表候補生であるレヴァンの専用機『ラファール・カスタム』は雪片によって切り刻まれ、無惨な姿になってしまった。盾は斬り飛ばされ、装甲の至るところに斬痕があった。

あいつはあのとき気迫で負けていたとはいえ弱すぎる気がしたが、やはりあの忌々しい学園祭の準備のためにＩＳにはろくに乗っていなかったらしい。帰ってきたら早速特訓だ、叩き直してやるとしよう。

「ちーちゃん！」

「千冬先輩！」

そして今は生徒会長不在の生徒会室で、私は最近やけに張り合っている二人に質問責めを受けている。

「だからあの夜は何もなかったと言っているだろうが」

「そんな訳がないんだよ！　私たちに仕事押しつけて、職員に根回しまでして、保健室で一体何があったの！？」

「そんな……ダメですっ。まだ高校生なのにそんなこと……不純異性交友です！　電気も消えてましたし、つまりそういうことなんですよね！？」

「……」

こいつらはどうやら学園祭の夜に私とレヴァンの間に何があったのか聞きたいらしかった。

無論、メイド服で奉仕していたなどと答えられる訳がない。あれは私もどうかしていた。あのときの私は私ではなかったのだ。今思い出しても恥ずかしい、この織斑千冬があんな格好をして『ご主人様』などと言っていただなんて……。

「……少なくとも、お前たちが考えているようなことはなかったからな。私は純潔だ」

「少なくともって……じゃあそれに準じた“何か”はあったってことだよね……？」

「抜け駆けですか……そうですか。でも本当に純潔を失っていないか確認するまでは信用できません……」

「……おい、お前らどういうつもりだ……！」

何だか二人とも目が血走っている。本能が警鐘を鳴らす。

二人がにじり寄ってくるかと思うと、急に距離を詰めて私の肩を掴んだ。何かヤバい……！

「おい馬鹿っ、離せ！　触るなぁ！」

山田君が私の腕を極め、束が制服のベルトに手をかけてきた。あっそんなとこ！

プシューッ

そのとき部屋のスライドドアが開き、プリントの束を持った一人の生徒が姿を現した。

「あ、えっと……」

「……」

一瞬の沈黙をもって状況を――彼女なりに――理解し、彼女は頬を染めながら言った。

「……お、お取り込み中のようなので、また後で来ます……」

「待て、君は誤解している！」

私の弁解むなしく、彼女は行ってしまった。後には圧縮空気の音だけが残された。

私は変態二人に目を向ける。

「さて、どうしてくれよう……？」

「待ってよちーちゃんっ……誰にでもあるでしょ、若気の至りというか何というか……」

「そうですよっ……そんなことより、千冬先輩はレヴァン会長のことどう思ってるんですか！？」

「なっ、それはどういう意味だ！？」

わずかに怯んだ二人だったが、山田君は立ち直り反撃してきた。ここに来た当初よりも随分とたくましくなったようだが、今は関係ない。

私は冷静だった思考を乱され、困惑する。

「別に何とも思っていないっ！　あんな奴に思うところなど、あるはずが……！」

「嘘っ」

慌てて答える私に束が指を突き付けてくる。

「ちーちゃん、最近おかしいもん。キャノンボール・ファストが終わってかられっくん見るとそわそわしてるし、二人きりで夜遅くまでいたり……本当にれっくんのこと何とも思ってないの？」

「そ、それは……」

それはあいつが事故で私のファーストキスを奪って……いや事故じゃなくてあれはあいつが無理矢理したんであって……。そもそも何で私は事故であることを否定させたんだ？

分からない……。

束は顔を近付けてきて、その目の真剣さに私は身を引いてしまう。

「こんなこと、ちーちゃんが親友だから言うんだけど……ちーちゃん、れっくんのこと好きなんじゃないのかな？　勿論私の勘違いかもしれないけど、ちーちゃんを見てるとそうだとしか思えないよ」

「私は……」

唇に手を当ててみる。あのとき、私は決して嫌ではなかった。ただびっくりして、それから事故ですましたくないと思った。どうしてだか、残しておきたくなったのだ。

レヴァンの傍の居心地は悪くない。いや、いいんだろう。馬鹿もするが、あったかいんだ。言うなればそう、『人たらし』とでも呼ぼうか。ただの女たらしかもしれないが。

私はいつの間にか、レヴァンの傍にいたいと思っていた。

「千冬先輩、私たちは抜け駆けはしたくないんです。ちゃんと彼に見てもらって、それで選んでほしいから……だから、あなたの結論を聞きたいんです」

「私の、結論……」

どうなんだろうか……。誰にも冷静に対応しようとしていたが、あいつにだけは本気で怒ってしまった。弟に向ける気持ちとは違う形のそれ。

レヴァンにだけは自分を型にはめずに付き合える。あいつがいるだけで、ありのままでいられる。幸せ……なんだろう。

レヴァンにくっつこうとする二人を見て何も思わなかった訳ではない。むしろ、何だか嫌な感じがした。二文字の熟語が思い当たって首を振ってかき消したのも一度や二度ではなかった。

「私は、あいつの傍を気に入っている……」

「それは私たちも同じだよ」

束の言葉に山田君が首肯し、見つめてくる。しばらくの沈黙。

私は意を決して口を開いた。

「そう、なのかな……変に気を張ることもなく、ありのままを迎えてくれる日だまりのような場所……。そんなレヴァンを、私は慕っているのかもしれないな……」

「ちーちゃん……」

「……ありがとう、二人とも。おかげで自分と向き合えそうだよ」

いまだ葛藤を続ける心を隠しながら、私は視線を外へ向けた。

◇◇◇

フランス、キサラギ本拠施設トライトン地下。

「完成だな……」

「『日だまり（アンソレイエ）』。苦労した甲斐があったわね、ボス」

俺とエラは目の前にたたずむＩＳを見て満足気に笑みを浮かべる。千冬との戦闘データを蓄積し、ボロボロになった『ラファール・カスタム』を全面改修した機体がこの『アンソレイエ』だ。学園祭で千冬に損傷レベルＤまで追い込まれ、いっそ一から作り直した方がいいのではと思われたがＩＳコアの初期化を嫌ったエラにより改修に留まったのだった。

「キャノンボール・ファストでは何とか勝てたが、模擬戦ではからっきしだったからなぁ。性能差も顕著だったし、これでまた巻き返

せそうだ」

俺は『アンソレイエ』の装甲を撫で、起動させる。表面の凹凸を足掛かりに登り、座り込むように装着した。

エラがコンソールを叩いてシステムを最適化する中、俺は機体スペックを確認する。

「『ラファール・カスタム』とは比べるべくもない性能だな」

「ボスが良質な稼働データを取ってくれたおかげで、改善点が洗い出せたからね。後、織斑千冬の戦闘データもおいしかったわ」

「ウイング・スラスターの枚数を増やして戦闘機動に幅を持たせることに成功している。いい仕事をしたな」

『ラファール・カスタム』では可動盾がスラスターの役割を果たしていたが、それだけだと盾として使用する間はスラスターとしての機能が制限されるため近接戦での立ち回りに支障をきたすのだ。そのため新たに二つのウイング・スラスターを増設して出力と運動性を向上させている。

「元の可動盾も大幅に改良して多機能化を図っているわ。スケイル・アーマー採用で可動範囲を広くとりながら関節の防御も可能になった。もう羽根をもがれてクソムシにならずに済むわね」

「口が汚い」

それはいいとして、このスケイル・アーマーはその名の通り鱗のような装甲だ。団子虫のようでもある、あくまで構造が、だが。

盾には真ん中辺りにさらに関節を設け、格闘適性を高めている。

甲殻類の腕ような印象を受ける。なぜそんなことをするかというと――

「――先端にリニア・パイルが一つずつ。これで二挺銃（ダブル・トリガー）の火力とパイル・バンカーの破壊力が両立できる訳だ」

いい機体だ。これで各距離対応の万能機の実現だ。しかもこのパイルは伸ばした状態で普通にブレードとしても使えるらしい。一粒で二度おいしいな。

「そうそう、そのリニア・パイルだけど、ノルウェー出身でドイツで科学者やってたオースゴールって坊やが作ったのよ。まだ二十歳なのによくやるわあの子、天才ってやつね。まあ私には劣るけど」

随分と変わった経歴の持ち主だ。ドイツはリニア系強いからな、彼の知識はこれから役に立つだろう。

それとエラ、俺も天才だってこと忘れてなイカ？　大変に遺憾でゲソ。

「それでその子、ファーストネームはトールっていうんだけど、多脚戦車に惚れちゃったみたいでジャンに弟子入りしてたわ。ああして変態は受け継がれるのね」

エラは苦笑いしながら作業を続ける。ディソーダー作ってからのあいつら何か怖いもんなぁ。最近ヒューマノイドＡＩに興味を持ち出して、『多脚ちゃんとお話し隊』とか言って量子コンピューター研究してんだよね。その内タチコマンズとか結成されるんじゃねーの。

「まあ、好きにさせておけばいいさ。多脚戦車の売れ行きは好調だ

し」

「うんうん、そういうボスに一つ相談なんだけど」

いつの間にか作業を終えたエラがこっちを向く。俺は手を握ったり開いたりしながら聞き返す。

「どうした？」

「私、やりたいことがあるのよね」

「……言ってみろ」

もったいぶる彼女に一抹の不安を覚えつつも、話だけは聞こうと続きを促した。

「空中要塞作りたいの」

「……はァ？」

「フェルミ計画って言うんだけど、ＰＩＣとシールド・メーカーを搭載した直径二、三〇メートルくらいのＵＦＯみたいなやつでね、空の戦車みたいな感じで――ほら、ヨーロッパって狭いし地形に左右されないから迎撃戦力として重宝されるかなって。ミサイルとでっかいＢＴ兵器で武装したら強そうじゃない？　ＩＳって戦力の圧倒的個体依存性に危険視する主張もあることだし、代替可能な人員で運用できるように形態を変えれば売れると思う訳ね――」

それから俺が調整のためにどこにも行かないのをいいことに、数十分間絶え間なく空中要塞の讃称を続けていた彼女に俺は見落とし

ているポイントを指摘してやる。

「……で、その見るからに金のかかりそうな計画に、予算の当てはあるのか？」

エラはキョトンとした顔で口をつぐむ。ったく、だったらまずは基礎技術開発の提案をしろと。こいつは優秀だが、時として大事なことを忘れて突っ走るからなぁ、今回は始める前に止めれてよか――

「――あるわよ、勿論」

「……はァ？」

ふざけたことを……。俺の知るかぎりじゃそんな超ユーロ的な新しい貨幣単位が必要になるくらいの予算の余裕はないはずだ。それともそれだけの投資を確保するだけのネタがあるとでも？

そう言うとエラは懐から写真を取出し、逆Ｖ字にしていた唇を切り裂くように歪ませて楽しそうに言った。

「それがあるのよ……うふ、コレなーんだ？」

「アァ？……なっ、こ、これは……！」

その写真には、束と俺が仲良く添い寝する様子がしかと写されていた。

「今しがた世界中のメディアに流したところよ。ＩＳの開発者と内のボスが“そんな関係”と知れれば、デュノアの株はだだ上がりね★」

「こんのデバガメ女狐がぁぁぁぁああ！」

俺は日本に帰ったときの三人への対処に頭を抱えることになるのだった。

・

ｓｅｃ．１６／日だまりと腹黒（後書き）

エラさん、星が黒い……。

ｓｅｃ．１７／真剣（前）（前書き）

『三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）』はアニメでの真耶さんの戦闘機動を参考にしてます。

ｓｅｃ．１７／真剣（前）

学園に戻ってきた俺を待ち受けていたのは、自分の身長ほどもある刀を軽々担いでいる般若だった。

「卑しい“たらし”め、私直々に成敗してくれる……！」

「千冬っ、こ、これについては確たる事情が――」

「話なら墓標の前で聞いてやる、まずはその首差し出せ……っ」

まさしく問答無用、一刀両断。目尻に涙をため下唇を噛みしめる千冬に俺は言葉が出なくなる。

忌々しい我が腹黒部下の手引きにより、束と俺の添い寝写真は電波と光の海を駆け巡り世界へと晒された。

勘違いしたアホどもに俺は抗議したが、束がその火に油を注いで炎上。女性の言質が取れてむしろ信憑性を高める結果となった。女尊男卑の風潮は着実に世界に浸透しているようだ。マジ爆発しろ。

見たことのないほどに弱々しい千冬の表情にうろたえる。キャノンボール・ファストのときなど目ではない。本当に悲しそうだった。

千冬は雪片を上段に構える。緩慢な動きながら一切の隙を感じさせない、まさに完成されたものだった。

だが俺もこのまま食らってやる訳にもいかないので、飛び出して腕を掴む。

「離せ馬鹿者っ！　離せっ……離して……うぅっ」

「千冬……」

千冬は雪片を下ろして俯く。いつも押し留めていた感情のダムが決壊したのか、ついに千冬は涙を流した。
今の俺にこいつを慰める資格などないだろう。それは分かっていても、俺は肩を抱かずにはいられなかった。

「千冬、俺が悪かったよ……本当にごめん」

「馬鹿者っ、何でよりによって今なんだ！？　せっかく……せっかく、自分の気持ちを受け入れたところなのに……！」

「ごめんな……お前を傷つけておいて今さら言い訳するつもりはないけど、でも……」

俺は耳に口を寄せながらささやく。

「俺は……まだ選ぶことはできない。三人ともとても大切で、誰か一人に決めるには拮抗しすぎているんだよ」

俺の言葉を聞いて一瞬、千冬の身体が震える。それから千冬は背中に手を回してきて俺と目を合わせる。泣き腫らした赤い目が普段の印象を完全に駆逐し、どうしようもなく綺麗だった。

「それは本当なんだな……？」

「あぁ」

「まったく、この女たらしが。だが――それはまだお前が私に惚れる未来もあると信じていいんだな？」

「あぁ」

「……分かった、信じてやる。信じてやるからお前も一つ覚えておけ、レヴァン……」

これ以上ないくらいに頬を赤くして、千冬は俺に顔を近付ける。

『何だ』と返す暇もなく、千冬は俺の唇に口付けた。

硬直すること数秒、動悸がして足元がふらつく。柔らかい感触と体温が伝わってくる。しかしそれを楽しむ間もなく、混乱している間に唇は離された。

「千冬っ何を――」

「好きだ、レヴァン。お前を愛している。必ず私のものにしてみせるから……その、覚悟しておけよ！」

「……な」

……告られた、自分の好きな娘の一人に。

何だよこれ、改まって言われるとすごく嬉しい。束や真耶はたびたびスキンシップ図ってくるけどこういうこと言わないし――ていうかセリフがクサすぎんだよ。そして何でそれがこんな様になってんだよ！

俺はくらくらする思考を必死に押さえつけながら、何とか返事をする。

「……俺も絶対、最高の一人を選びぬいてみせるから、少しの間時間をくれ。頼む」

「ああ。なら、それまで私は女を磨くとしよう。……きっと私を選

んでくれるものと信じているよ、レヴァン……」

ああ、俺は何て最悪な男だろうか……こんないい女を待たせるなんて。しかしそれならなおさらよく考えて決めねばなるまい。それが好意を向けてくれている彼女たちへの礼儀だ。

俺は三人の中から選んだその一人を伴侶にすると、心で密かに誓った。

◇◇◇

第一アリーナでちーちゃんの『暮桜』とれっくんの『アンソレイエ』が対峙している。私情を挟まない正真正銘の真剣勝負。

私とれっくんが夏休みにフランスに行ったときの添い寝の写真が流出して、ちーちゃんは少しの間荒れたけどもう大丈夫みたい。きっと私が聞いたら嫉妬するような仲直りを二人はしたんだろうけど、雑誌とかのインタビューにはれっくん『伴侶と認めた女性しか抱かない』って格好よく言い張ってたから安心はしてる。

ちーちゃんや真耶――ライバルだから名前で呼んでやる――は熱愛疑惑の記事を見てから落ち込んでたけど、私もこんなことで恋が叶ったなんて思うほどおめでたい性格してないから、公平を期すために三人が取り合いをしてるって構図は一応公にしといた。私のことをちゃんと見て選んでほしいし、ちーちゃんと仲違いするのも避けたかったから。

ちーちゃんは雪片を両手で握り、れっくんは両手に別々の銃を持っていた。プライベート・チャネルで話す音声を最近作ったウサ耳アンテナで拾う。

『今日ばかりは勝たせてもらうぞ』

『機体が変わったとて、ブランクが埋まる訳ではない。切り刻んでくれる』

両者やる気は満々みたい。試合開始のブザーが鳴る。同時に、隣に座っていた真耶が私の服の裾を掴んで話しかけてきた。

「束先輩、二人が何言ってるか分かりませんか！？」

「ちょっと何なの君、邪魔だよっ」

「このウサ耳ですか？　私にも何を話してるのか教えて下さい！」

何かここのところ真耶がおかしい。いつもは引っ込み思案なのにやたらと押しが強いのだ。鬱陶しいったらありゃしない、ほら今だって私のウサ耳を奪おうと――

「――やめなって、もう！　分かった聞かせるから！」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

本当何なのこいつ……。私は仕方なくパソコンを取り出してウサ耳とリンクさせる。数秒後、音声が出力された。

『マッハで蜂の巣にしてやんよ！』

スタジアムに目を戻すと、『アンソレイエ』は四枚の加速推進翼（ウイング・スラスター）を地面に対してX字に広げ、滑るように移動していた。両の手に握られたBTライフルとアサルトライフルが、それぞれ異なる弾速と発射間隔で『暮桜』に斉射を浴びせかける。

「すごい、千冬先輩……私だったら本当に蜂の巣になってますよ」

「比べるのもおこがましいね」

「うぅ……」

ちーちゃんもかなり躱してはいるけど、特性の違う二つの銃火に徐々に削られていっている。見たところ『アンソレイエ』にも『神経精密同調システム（ＮＥＸＵＳ）』が使われているみたいだから、その照準性能は他のＩＳよりもずっと高い。それを七割方回避してるんだからその技術は文句なしに学園一だろう。

「でもネクサス使うとＩＳが二次移行しなくなる可能性があるんだよねー」

「えっ、そうなんですか」

「……君と会話してるつもりはないんだけどね」

まあいいや。

ちーちゃんはこのままだとジリ貧だと考えたんだろう急降下すると共にスラスターの出力を最高まで上げ、れっくん目がけて突撃していった。

うん、この思い切りのよさこそちーちゃんだよね。

『はぁぁぁあ！』

『そう簡単に振らせるかよっ』

れっくんもちーちゃんに向かって加速する。しかし急にスラスターを下に向けたかと思うと上昇しだした。勢い余って『暮桜』は『アンソレイエ』とすれ違う。
フェイントをかけて雪片の必殺の斬撃を躱したれっくんは、そこで宙返りを打ってちーちゃんを後ろから狙い撃つ。

『やるっ……！』

でもちーちゃんも負けてない。攻撃が外れたと分かるなりすぐさま機動を修正する。いくらか被弾しながらも、『三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）』で体勢を立て直す。
『三次元躍動旋回』、ちーちゃんが発案したＩＳの戦闘機動の一つ。と言ってもスペック的に『暮桜』以外のＩＳじゃ無理だったから、織斑千冬の代名詞の一つになってるけど。
鋭く旋回移動しながらも機体自体は別の方向に向いている。ＩＳのＰＩＣの特性である三六〇度全方向への加速能力をフルに使って、方向転換と視点移動を別々にかつ同時にこなすことができる。これによって予測射撃を狂わせたり、次のアクションへの時間短縮ができるのだ。

「いつ見てもキレイだねー」

その姿はまさしく『蝶のように舞い、蜂のように刺す』を体現していると言える。
ちーちゃんは『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で勝負をかける。ミサイルのようにＩＳエネルギーの尾を引き、一気に『アンソレイエ』の正面に迫った。

『らぁっ！』

雪片がれっくんを襲う。関節を増やした可動盾が斬撃を受け止め、

盾表面に深く爪痕を残した。

「危ないっ！」

右の盾がカウンターパンチを繰り出すと共に真耶の叫びが聞こえた。うるさい。

ガギィィンッ！

何が起きたかよく分からない。大きな火花が散ったかと思うと『アンソレイエ』の可動盾から射出された杭が、『暮桜』の『非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）』を貫通していた。

『これが男の魂だ……！』

どことなく卑猥な表現をするれっくんだけど、今の一撃は格好よかったかな。

れっくんはそのまま左の盾を構え、さらにＢＴライフルを『暮桜』に向けるけどちーちゃんは身体をひねって回避する。

『ただではやらせん！』

勢いを乗せて、これまでも何度か見たことのあるスラスター全開の回し蹴りを放つ――

ガンッ！

『チィッ』

――と見せかけて、雪片でＢＴライフルを切り払う。中枢を破壊さ

れたＢＴライフルがレーザー・ジェネレーターをオーバーロードさせ、爆散した。
両者のシールド・エネルギーを削りながらも、ちーちゃんは杭の拘束から逃れる。『非固定浮遊部位』持ちの強みである姿勢制御の早さで、雪片の先制攻撃が決まった。

『たぁっ！』

綺麗な面。篠ノ乃流剣術の一刀が『アンソレイエ』に繰り出された。

――『暮桜』、シールド・エネルギー、残り２４６

――『アンソレイエ』、シールド・エネルギー、残り２１７

.

ｓｅｃ．１７／真剣（前）（後書き）

キリが悪いので前編ということで。

ｓｅｃ．１８／真剣（後）それとほのぼの（前書き）

ＰＶ４８８０４９、ユニーク６２９６７、お気に入り１０９４。
いつの間にかすごい数字に……。

ｓｅｃ．１８／真剣（後）それとほのぼの

雪片の斬撃を受けた『アンソレイエ』が下降していく。私は追撃しようとするが、レヴァンは左手のアサルトライフルで牽制射撃し寄せ付けない。

『今のは利いたぜっ』

レヴァンは『三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）』で体勢を立て直し、可動盾を前に突き出して急速後退していく。腰の後ろから小型のマシンガンを取り出すと、再び二挺銃（ダブル・トリガー）で引き撃ちを始めた。

「さすがはデュノアの御曹司と言ったところか」

前は不可能だった機動も改良の結果そつなくこなす。こいつのことだから、戦闘毎に私と『暮桜』のデータを採取していたんだろう。

先ほどより弾幕は濃くなったが、弾速はＢＴライフルよりもずっと遅いので避けられないこともない。

しかし今は右のスラスターを損傷している。これでは確実に機動に支障をきたす。やはり短期決戦しかないか。

このコンディションで『三次元躍動旋回』を行うには『アンソレイエ』の照準性能的にリスクが高いため、より単純で効果的な『円（サークル・ロンド）状制御飛翔』で実弾斉射を躱す。連射系銃器の回避に特化した機動だ。

いかにＩＳにＰＩＣが搭載されているとはいえ、銃弾にまでその効果が及ぶことはない。引き撃ちにより相対的に減速した弾丸を躱すのは『暮桜』をもってすれば簡単なことだ。

私はレヴァンの直上にいたると同時、雪片を下段に構えて突撃し

た。

『もらった！』

地面を抉りながらも逆袈裟に切り払う。飛び跳ねるようにして躱すレヴァンに私は踏み込み、雪片を真一文字に振り抜く。とっさに可動盾でガードするが、構造上受け流せない攻撃に『アンソレイエ』はわずかにバランスを崩した。

「せいっ！」

さらに一歩踏み込んで、渾身の突きを放つ。雪片の切っ先がレヴァンの喉を正確に捕らえ、絶対防御を発動させた。エネルギーを大きくけずりながら、特徴的な光と共にシールドがレヴァンを守る。だが――

（なぜ笑っている……なっ！？）

『今度こそ捕まえたァ！』

『アンソレイエ』の右の可動盾のパイルバンカーから杭が撃ち出される。先ほどとは逆、左のスラスターを貫き『暮桜』を拘束。左の可動盾が地面に向けて杭を撃ち込むと、力任せにアームを振りかぶり私を地面に叩き付けた。

「ぐあっ……！」

（攻撃が決まった瞬間の気の緩み……付け込まれたか！）

予想外の攻撃にまともな反撃もできず、マウントを取られる。レ

ヴァンは雪片を握る右手を踏みつけて、地面から左の杭を引き抜くと全身のバネを利かせるようにして私目がけて殴り付けた。
パイルバンカーの一撃がシールド・バリアーを突き破り、『暮桜』に絶対防御を発動させる。抜けだそうにも杭で左の『非固定浮遊部位(アンロック・ユニット)』を縫い付けられている上右手を押さえられ、上手くいかない。レヴァンはそのまま連続でパイルバンカーを当ててくる。

『動けないんじゃ「暮桜」もただのＩＳだな！』

（まずいっ、なんとかして抜け出さねば……！）

やられてたまるか！
機体を新調したくらいでやられていては、織斑千冬の名が廃る。そもそもＩＳの基本性能は『暮桜』の方が上なのだから、ここで負ければ技術の差ということになる。一瞬の油断が招いた結果とはいえ、そればかりは悔しすぎる。
惚れた上に戦いでも下されていては、剣士として情けない。それなら今すぐこいつのために股を開いた方がましだ。

（織斑千冬はその程度で下せるほど安い女ではないぞ！）

私は諦めない。一か八か、覚悟を決めてＩＳの全エネルギーを放出する。
『瞬時加速(イグニッション・ブースト)』。
地面が爆発し、土煙が立ち上がる。大小の破片を撒き散らしながら、『暮桜』は空へと舞い戻る。『アンソレイエ』は土と共に弾き飛ばされ、空中で一回転し両手の銃を構える。

『これだけやっても立ち上がるか。やっぱお前、最高だよ』

「なら私を選ぶか？」

『どうだかな、決めるにはまだ足りない』

「なら、私をもっと見せてやる！」

雪片を両手で握り直す。レヴァンが銃撃しながら一直線に突進してくる。私も最小の動きで回避しながら、多少の被弾は無視して突撃した。

（この一撃で決める！）

レヴァンがパイルバンカーを構える。私は雪片を居合いの構えで握りしめた。

一方は上空から、もう一方は地上から。

『アンソレイエ』のパイルバンカーが当たればあいつの勝ち、それを掻い潜って居合いが決まれば私の勝ち。

両者『瞬時加速』を発動し、一気に彼我の距離を詰め互いの得物を交えた。

◇◇◇

一段と大きな火花が散る。相対速度は音速を超えているだろう、凄まじい速さですれ違い、一撃が決まった。

『――勝者、織斑千冬』

試合終了のブザーが鳴り、アナウンスが勝者を告げた。

「あーあ、れっくん負けちゃったね」

「……」

真耶は見入ってるのか反応しない。都合のいいやつ。

れっくんは静かに着陸し、ちーちゃんの方に振り替える。

『まだ、足りないか……さすがだな』

『ふん、最初のパイルバンカーが直撃していれば、私が負けていたよ』

お互いに健闘を讃え合う姿がとても綺麗だ。さっきまでの張り詰めた雰囲気は霧散し、そこにはあったかい空気があった。

「二人ともお疲れ様、ピットで待ってるよ」

突然の通信に驚いたみたいだったけど、すぐに了解の返事が来た。れっくんがすぐに私のいる方を向いてくれて嬉しかったかな。

ちゃんと見ててくれてるんだよね、本当抜け目ない。そんなれっくんに束さんはメロメロだよーと、私は小さく手を振っておいた。

「ほら、さっさとピット行くよ」

「ふぇ？……あ、待ってください！」

何かとトロい真耶を連れて、私はピットに向かった。

◇◇◇

ピットにはすでに二人が帰ってきていた。二人ともまだＩＳを展開したままで、戦闘の傷痕が至るところに刻まれている。

「お帰り、れっくーーん！」

束先輩が勢いよくレヴァン会長に抱きつく。レヴァン会長はすぐさまＩＳを解除して、束先輩を抱き留めた。

「もう、抜け駆けはダメですってば！」

私も続いて抱きつく。この人は基本的に拒むことをしない。きっと私たち三人なら、いつどこでハグを求めても答えてくれるんだろう。そんな安心感がなければ私なんて絶対に抱きついたりできないけど。

私たち二人の背中に手を回して、その広い胸板で迎え入れてくれる。これが私一人のものになればきっと幸せだろうに。

「ただいま、真耶、束」

「ぶー、何で束さんを先に呼んでくれないのー」

「ごめんごめん」

束先輩の我が儘も笑って受け入れて、優しく頭を撫でる。ちゃっかり私の頭も撫でてる辺りずるい人だと思う。

しばらくして私たちを離すと、そっぽ向いていた千冬先輩に近寄る。

「千冬」

「何だ、このすけこまし」

「言うなあ、まあいいけど――」

レヴァン会長は千冬先輩の髪を撫でると、そのまま――

チュ

「なっ何をするっ！」

千冬先輩の頬にキスを落とした。って……

「……何やってるんですか！　ずるいっ、ずるいです、そんな！」

「れっくん、いくら何でもキスはないんじゃないかな！？」

そんな、レヴァン会長と千冬先輩がそこまでいっていたなんて……！　束先輩は添い寝したこともあるし、私だけ何もない……。不公平です！

「いや、千冬は抱きついたりしたら怒るだろ？　だから――」

「だからじゃないの！」

「うぅ……」

何だか涙が出てくる。私だけ何にもない、私だけ、私だけ……。

だいたいレヴァン会長は節操なしなんですよ。普通なら複数の異性から言い寄られたらある程度距離をおいて、一人ひとり見極めるものなのに、このすけこまし会長は全員を恋人みたいに扱うから。ハグしたり頬擦りするのは当たり前、ときにはキス……完全に女たらしです。

しかも三人ともしっかり気持ちを込めてるし、それを上手く回してるから質が悪い。そりゃあ想い人からそんなことされたら嬉しいですけど、一人だけ役得みたいな顔してるからちょっとムカついてます。ぷんぷんです。

「レヴァン会長……」

「……あぁ、悪い。真耶にだけ何もしてやれてなかったな……。よし、今度二人きりでデートにでも行こう！　きっと楽しいぞ」

「……はい、よろしくお願いします……」

うぅ、女の子の言いたいけど言いにくいことにも機敏に対応できるし……卑怯の極みです。だから愛想尽かすこともできないんですよ、大好きなんです。

「れっくんってば！」

「ふふ、我が儘言う束も可愛いよ」

こんな感じで今日もすぎていく。

ムフフ、レヴァン会長とデート……ようやく我が世の春です。そうと決まればおめかししないと。ルームメイトの娘を誘って服を買いに行こう。恋する乙女はやることがいっぱいありますね。

.

ｓｅｃ．１９／いざ行かん（前書き）

ＰＶ１２４１７４２、ユニーク１８０８９０、お気に入り１８９８、ありがとうございます。

長らくお待たせしました。とりあえず導入部だけ……。スーパー真耶タイムは次回に。

ｓｅｃ．１９／いざ行かん

前髪よし、服装よし、眼鏡の角度よし！　山田真耶、デートの用意は完璧であります！

この日のために買っておいたヒール高めのミュールを履いていざ出陣。ワンピースタイプの服で清楚さを演出しながらも、しっかりと谷間は強調しています。印象付けるために眼鏡も新調しました。ルームメイトの娘に協力してもらって人生初のお化粧もしています。

まさに今日の私は一味違う、大人への階段を数段上がったセクシー真耶なのです。

「私の姿を見ればレヴァンさんも私に注目せざるを得ないはず……」

もう十一月の頭だというのに、レヴァンさんのプライベートに触れるのはこれが初めてだったり。生徒会の仕事でいつも一緒なので三人の中では彼といる時間は一番長いはずですが、その割に一番進展してない……。

きっと私は彼と一緒にいることに満足して、その先へ踏み出していなかったんですね。その程度で一喜一憂していては自己満足の域を出ない、もっと積極的にアタックを仕掛けなければなりません。

「レヴァンさん！」

モノレール駅の前に立っているレヴァンさんの方に走っていく。時計を見るとちょっと遅刻しちゃったみたい。全然気付かなかった……怒ってるかな？

「ごめんなさい、その……待ちました？」

「俺が早く来すぎただけだよ。それに、女の子を待つ時間も、デートの楽しみの一つだから気にしなくていい」
怒ってないみたいで少し安心。紳士ですね。女の子相手にはだらしないところがあるけど、こういうところは好きです。
「――楽しかったですか？」
調子に乗って冗談を言ってみる。レヴァンさんは一瞬驚いたような表情を見せると、にっこり笑って答えた。
「もちろん。真耶がどれくらい可愛くなってるか気になったからな」
「ど、どうですか？」
若干うつむきながら聞く。上目遣いを意識しながら一歩近付いた。
「予想以上に綺麗で驚いたよ。ワンピースも似合ってるし、メイクも。あぁ……大人っぽくなった」
「えへへ……」
お互いに頬を染める。慣れてるはずなのにレヴァンさんまで恥ずかしそうにしてる。やっぱり私の纏う大人ーな雰囲気に魅力を感じてくれてるみたいです。
「真耶」
髪を撫でられる。顔を上げると――

「あ……」

頬に柔らかい感触。うわー、キスされちゃいました！

素直に嬉しい。好きな人に好意を向けてもらってるのがしっかり分かるから。今だけは私だけを見てくれてる。愛されてる。

レヴァンさんは多分三人にそれぞれ別な魅力を見つけて、好きになったんだろう。彼は私たちの好意に甘えている、それは分かるけど、もしかしたら私たちも同じかもしれない。現にこうして幸せを感じているのだから。

そう考えると私って勝手だな。彼が他の二人とイチャイチャしてると嫉妬するくせに、自分は自分でイチャイチャしたいって思ってるんだから。普通なら最後までそんなことできないかもしれないのにね。

あれ？　レヴァンさんは一人を選んだ後どうするんだろう？　今でさえ全員と恋人に近い関係なのにこれ以上進展することなんてないような……いや、考えるのはよそう。今日は楽しい楽しいデートの日なんだから。

熱を帯びる身体で彼の左腕に腕を絡めて頬を擦り寄せる。胸が当たって緊張した風な彼を引っ張っていく。今日の私は大人なんだ。

彼の赤い髪が私の頬を撫でた。

◇◇◇

「何かなアレは？」

「いくら何でもキザすぎる」

建物の陰から覗いた二人はまさにバカップルの様相を呈していた。

特にレヴァン。
レヴァンが真耶とデートすると聞いて、私と束が黙っているはずがない。私たちは早速後を付け、最初に目にした光景がこれだ。
束はさっきから瞬きしていない。
「何かな何かな、あの腐女子的妄想の具現みたいな王子様と地味子の図は……束さんの時はそうでもなかったのに」
「久しぶりにレヴァンを気持ち悪いと思った気がする――って束っ、『お前の時』とはどういう意味だ?!」
「しー！　ちーちゃんバレる、バレる！」
聞き捨てならないことを聞いて声を張り上げた私を束が押さえ、陰に引っ張った。
私の口を両手で塞ぐ束に眉根を寄せると、束は誤魔化すように言う。
「ほ、ほら、二人とも行っちゃうよ。後を追わなきゃ」
「デートをしてないのが私だけだと……」
後輩に遅れをとるとは、私の沽券に関わる。由々しき事態だ。特殊な趣味でもない限り女として二人に負けているとは到底思えないが、レヴァンにはそれでも足りないというのか。
「私の方が真耶よりも綺麗なはずなのに……」
「もう、ひがんじゃめーだよ。それに、ちーちゃんはメイドになればいくらでもれっくんを誘惑できるじゃん」

「……あ、あんなもの二度と着るかっ」

あの時は本当にどうかしていたのだ。正常な織斑千冬があんなプレイに走るだなどと……一歩踏み外せばとんでもない“間違い”が起こっていたかもしれないんだぞ。いや、起こっていればよかったのか？

むぅ……よく分からん。

「うー、確かに束さん的にはそっちのがありがたいけど……」

束がぶつぶつ言いながら視線を通りの方に向ける。するととたんに目を見開き騒ぎ始めた。

「あっ、ちーちゃん二人とも行っちゃったよっ、追わなきゃ！　ウサ耳レーダー始動！」

束は手品のようにどこからともなくプラスチックな質感のウサ耳カチューシャを取出し、頭にセットする。私はそんな束の髪がサラサラとなびくのを自分の癖っ毛気味な髪と比べて、ちょっとだけ羨ましくなった。

「ビビビビッ、こっちだぁ！」

「むぅ……」

私たちは一抹の不安と一杯の恋心を胸に、レヴァンたちの後を追った。

ｓｅｃ．２０／進化せし真耶１（前書き）

ＰＶ１４１６１２１、ユニーク２０８０２６、お気に入り２０６６ありがとうございます。

クソ永らくお待たせいたしました！　都合により分けます。それはすなわちスーパー真耶タイムも二話連続ということ。

ｓｅｃ．２０／進化せし真耶１

ヤバイ、真耶が可愛い……！

「あーん……あむっ」

俺がすくったパフェを俺の左腕にしがみ付きながら小さな口でぱくりと食べる真耶。時折口の端に付いてしまう生クリームを指先で拭ってそのまま舐めとる仕草は子どもっぽくもあり、同時に女の子を感じるものだ。そして俺の視線に気付いて上目遣いで小首を傾げる。

狙ってやってるのかと言いたくなるぶりっこ的仕草だが、真耶のことだ。素でやってる可能性が高い。箱入りで育てられてきたのかこの娘は基本的に無防備だし、普段アピールしてくるときはもっと不器用に気持ちをぶつけてくる。

メイクでいつもより色っぽさの増した唇が言葉を紡ぐ。

「レヴァンさんもほら、パフェ美味しいですよ。私、あーんしますから」

「あ、あぁ」

真耶は俺の手からスプーンを取ると、パフェをすくって近付けてきた。しかし俺としてはパフェよりも、『あーん』とか言いながら光を反射している真耶の唇の方に目が行ってしまう。

いつものスキンシップのおかげでＦカップの胸の感触はまだ我慢できる。でもこの唇はマズい。化粧して数段魅力の増した女の子が、こんな近くで無防備を晒しているのだ。いつもは三人共すっぴんだ

から年相応の可愛らしさだが、童顔でかつ一番若いはずの真耶がいきなり五年後の姿でやって来たみたいな……。しかも大人っぽい雰囲気なのに幼い仕草でダメ押しときている。
この娘、将来とんでもない美人になるわ……。いろんな意味で。

「……」

「もう、レヴァンさんったら……さっきまでの威勢はどうしたんですか？」

「いや、何というか……ゴメン」

「し、しょうがないですねっ……そんなに私の唇に興味津々なら……！」

そう言うと、真耶はおもむろにパフェを口に含みそのまま火照った顔を近付けて来て……って、ちょっ！

「んっ……むぅ」

「ん、んんっ！」

柔らかい温もりと甘い生クリームの味に、しばし思考停止する。舌が入り込んで来て、唾液と共にすべての生クリームを俺の口に押し入れた。

「ぷはっ」

どちらのものとも分からない唾液が糸を引いて切れた頃に、真耶は自分のしでかしたことをようやく理解したらしい。とたんに赤面

して俯いてしまった。
かく言う俺も、こんなにドキドキするキスは初めてで、つい下を向いてしまう。何てったって公衆の面前で、真っ昼間からこんな濃厚なプレイをすることになるとはまったく思ってなかったのだから。
そのせいで視界の隅でぴょこぴょこと揺れるウサ耳のことなど、まるで認識できなかった。

◇◇◇

「んーっ！　んーっ！」
「ちーちゃん抑えてっ……！　今飛び出したられっくんからの好感度下がっちゃうっ」
『放せ束ぇ！　こんな状況を見過ごせるかぁっ！』
「気持ちは同じだけど、お願いちーちゃん……！」
暴れるちーちゃんを何とか取り押さえる。口をふさいでいるから声は漏れていないものの、バレないか心配だ。
プライベート・チャネルで抗議してくるも、今殴り込んで二人のデートを邪魔するのはマズい。それはいろいろと私たちに寛容なれっくんでもさすがに怒るだろうし、真耶のことはどうでもいいけど、れっくんもデートを楽しみたいはずだから。
「ふぅ、ふぅ……！」
ようやく冷静さを取り戻したちーちゃんが肩で息をしながら二人

を睨む。

「もう。らしくないよ、ちーちゃん。ここで飛び出しても仕方ないでしょ？」

「だからといって、放っておくのかっ？」

眉間にしわを寄せてちーちゃんが言う。

確かに私も今日の真耶の大胆さというか、調子に乗りすぎな行動は気に食わない。れっくんもれっくんで化粧したくらいで惑わされすぎ。イライラする。

「でもね、デートをぶち壊しにしたって私たちの幸せは掴めないんだよ。他人を落としめるより、自分がいい目を見ることを考える方が建設的だと思わないかな？」

感情に任せて行動するのは簡単かもしれない。でも、目的を忘れてしまっては本末転倒だ。何より、れっくんはそんな後ろ向きな考えの相手を好きにはならないだろう。

「……」

押し黙るちーちゃん。その表情は悔しげで、寂しげだった。

「そう、だな。そんなことをしても、醜態を晒すだけだな……」

「ちーちゃん？」

「お前に諭されるとは、私もまだまだらしい……」

何かちーちゃんが暗い。いつもの凛然としたちーちゃんじゃない。かなり落ち込んでるみたい。
私の見たことないちーちゃんだ。自信のなさそうな顔をしている。
ぽんと、頭に手を置いて撫でてあげる。
「た、束？　おい、他の客が見てる前で……！」
「ちーちゃんってば、案外嫉妬深いんだね。しかもそんな自分を憎んでる」
力強くて真っ黒な髪に指が埋もれる。慌てる様も、小動物みたいだ。
親の温もりを知らないちーちゃんに優しく語り掛ける。
「いつも弱味を見せないように気を張ってたんだね。大丈夫、束さんがついてるから。自分の汚い部分を嫌わないで。ちーちゃんはありのままを受け入れてくれるれっくんを好きになったんでしょ？」
「……そ、そんな憐れむような目で見るな。まあ、確かにレヴァンを好きになった理由は間違ってないが……あいつには何も気兼ねなく当たっていけるからな」
「うんうん♪」
少し明るくなった。強そうに見えて、ちーちゃんは思いの外メンタルが弱いらしい。長年の付き合いでの新しい発見だね。いくら超天才の束さんでも、他人の恋は作れないからね。
私はいい子いい子を止めると、ちーちゃんに言った。
「どろどろした感情はデートが終わってからまとめてぶつけちゃお

！　それまでは我慢だよ、私も頑張るから」

「分かった」

ちーちゃんは恥ずかしいのか視線を逸らして承諾した。素直じゃないね。

「ほら、今日は束さんとちーちゃんのデートでもあるんだから。パフェ食べよ！　一個しかないけど。はい、あーん」

「あ、おい！　相変わらずだなお前は……あ、あーん……」

頬を赤くしながらも応じてくれるちーちゃん。やっぱり可愛いね。パフェどこから出したって？　あらかじめ注文してたに決まってるじゃん！

「……うむ、美味いな。というかいい加減お前はそのウサ耳を取れ、カムフラ率が下がる」

「えー。ウサギからウサ耳を切り取ったら、死んじゃうんだよ！？」

「じゃあその横に付いてる耳たぶはいらないから取っていいな？」

「え！？　ちょっ、止めてっ、痛い！　引っ張らないで！」

そうして私たちのデートの時間は過ぎていった。あと耳たぶ痛い……。

ｓｅｃ．２１／進化せし真耶２（前書き）

ＰＶ１４６１４１７、ユニーク２１４３６５、お気に入り２１０５、ありがとうございます。

真耶さんや千冬さんが成長します。

ｓｅｃ．２１／進化せし真耶２

二人くっつきながら歩く帰り道、手はもちろん恋人繋ぎ。時間はそろそろ夜になろうかというところ。

冬用のモコモコのジャケットや可愛い服も選んでもらったし、一緒に映画も観ました。スクリーンの照り返しでいつもと違った趣きを見せるレヴァンさんの顔は相変わらず、濃すぎず薄すぎずの日本人受けする美形で、自然と唇を求めてしまいました。あんな風にキスできることが目標だった私には、大きな収穫でした。

「今日は最高に楽しかったです！　レヴァンさんとの距離もぐっと近付いた気がします」

「そう言ってもらえて嬉しいよ。俺もいつもと違う真耶の新しい一面を見れたし、真耶のことをより深く知れた」

私が笑顔で言うと、レヴァンさんも微笑みながら返してくれました。

人生初のデートはとても上手くいったと思います。今日だけは彼は私のもので、まさしく私が思い描く理想的な恋人関係。今日一日で人として、女として、自信が付いたんじゃないかな。いつもに比べても、かなり大胆だったし。恋は女の子を可愛くするとはよく言ったものです。

しばらく歩くと、レヴァンさんは正面に顔を向けたままふと聞いてきました。

「真耶は、俺のことどう思ってる？」

その声色は、先ほどまでのふわふわした雰囲気とは打って変わって真剣味を帯びていて、真意を図るのに数秒の時間を要しました。
私は特定の個人に操(みさお)を立てずに三人の女の子を囲っていることを言っているのだと判断して、できるだけ優しく答えました。

「最低の男ですね」

「……えっ？　あ、ああ。自覚してる」

私の口からこんなストレートに非難の声が発せられるのは予想外だったのか、一瞬狼狽えるレヴァンさん。そんな彼に、私は言葉を続けます。

「あなたが三人を囲っている自分のことをどう思っているかはともかくとして、それでも少なくとも私は、幸せを感じています」

千冬さんや束さんがどう思っているかは分かりません。でも彼がハーレムを形成せず、私たちと生徒会の役員としてしか交際しなかった場合、私が今日を迎えることはなかったでしょう。引っ込み思案な私のことですから、きっと片想いのまま進展もなく、そのまま卒業まで想いを告げられずに終わる様が目に浮かびます。

「私が今日の日を迎えられたのは、間違いなくあなたが甘えさせてくれたからです。私だけを見てくれないのは悔しいし、妬ましいですけど、想いすら伝えられずにお別れなんて、もっとみじめですから」

レヴァンさんは私の頭に手を添えて、優しく撫でてくれます。日々ケアを欠かさない髪が彼の指に絡んでサラサラと柔らかく踊り、温もりを伝えてきました。

「そうか……」

短く答えておもむろに顔を近付けてくる彼を見つめながら、「それに」と付け加えます。

「――今、すっごく充実してるんです」

にっこり笑った私に、レヴァンさんは映画館でしたのと同じ、慈しむような笑みを向けます。

今日何度も味わった彼のあったかい唇が、三度私のそれに触れたのでした。

◇◇◇

生徒の多くはまだ夕食を摂っているだろう時間帯、人がまばらな大浴場で少し早めの風呂に入る。

レヴァンと真耶のデートを追って束と一日過ごしたが、いかな親友と言えど私の中の黒い感情を押さえ込むことはできなかった。

浴槽に束と並んで浸かる。汗に紛れて涙が頬を伝った。

「ちーちゃん、泣かないで……」

「泣いてなどいない……ぐすっ」

「もう……」

本当は今すぐにでも泣き付きたい。でもいつも纏っていたプライ

ドや“私”という殻が、それを許さなかった。
束が俯く私の頭を撫でる。思えば、こいつはいつの間にこんな世話好きになったのだろう。今までずっと私がお守りをしてやっている気でいたのに、まるで私が面倒を見られる側になっているようだ。

「お前は変わったな」

「ちーちゃんもね。やっぱりれっくんの影響かな？」

「だろうな。私がこんなに弱くなってしまったのも、全部あいつのせいだ」

たった一人の家族を守るために、そして恩に報いるために、こいつの研究に手を貸した。
弟を“奴ら”から守るために、ずっと強くあろうとしてきた。それこそが私の生きる理由だったのに、そのためだけに生きようと思ってきたのに、私は女の幸せを知ってしまった。
兵器としての私、姉としての私。それらが徐々に磨耗し、女としての私が台頭してきて、私は一気に弱くなってしまった。

「それはどうかな？　そもそもちーちゃんは強かったのかな？」

「どういう意味だ？」

さらりと言ってのける束に私は凄味を利かせて返すが、束は動じた風もなく淡々と言う。

「今日気付いたことだけど、本当はちーちゃんはすっごく弱くて、私以上に寂しがり屋なんじゃないかって」

「そんなこと……」

「――ないって、言い切れる？」

「……」

束の言葉に、私はたじろぐ。

認めたくなかった、自分が弱いだなんて。一夏を守れるのは自分しかいないんだから。

でも、レヴァンのことで嫉妬して冷静さを失う自分を自覚して、自分がまだまだ未発達な少女でしかないという確信が生まれてくる。

「ちーちゃん、強がらなくていいんだよ。私もれっくんも、ありのままのちーちゃんを受け入れるから。変に取り繕わないで……親友でしょ？」

「うん……」

悔しいが、私は弱い。私に比べれば、束の方がずっと屈強だ。いや、恋を通じて得た経験がこいつを成長させたのか。

私は自分より小さな束の肩に身を預ける。

「でも、自分以外の誰かのために頑張れるちーちゃんは、私とは違う強さを持ってるんだと思うよ。今回はたまたまちーちゃんの弱いところが露呈しちゃっただけだから、ね？」

「でも、もっと強くなりたい。自分の弱さを受け入れる強さがほしい」

目尻に浮かんだ涙を拭う。もう泣いてない、大丈夫だ。

たった今、織斑千冬は成長した。心のもやが晴れていく。まるで脱皮でもしたみたいだ。成長するとは、こんなにも清々しいものなのだな。
私はもう迷わない。レヴァンを好きだという気持ちに真っ向から向き合っていこう。

「よおし、そうとなれば突撃だよちーちゃん！」

「突撃？　どこにだ？」

急に浴槽から立ち上がった束に驚きながら、おうむ返しに質問する。

「決まってるじゃん、れっくんの部屋にだよ！　今日の鬱憤を身体で晴らしてもらわないとね！」

鼻息を荒くして言う束は少し気持ち悪いが、それは賛成だ。いくら気分がよくなったとは言え、嫉妬心が解消されたわけではない。

「そうだな。あれだけ真耶を甘やかしたんだ、散々溜まった欲求不満をぶつけてやっても文句は言われまい」

「そうと決れば善は急げだちーちゃん！」

「ああ」

私たちは大浴場から出て、髪を乾かすのもそこそこにレヴァンの部屋へと早足で向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6683q/

ＩＳ－疾風の生更ぎ－

2011年10月7日00時20分発行